

J2.99:16

16 of 20

May 1945
Vol. 3, no. 5

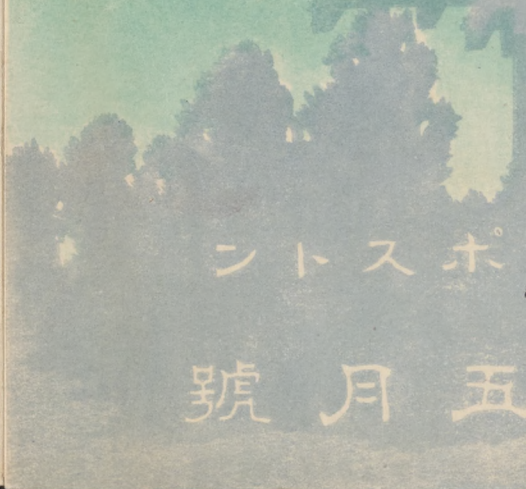
67/14
C

文

藝

ポスツント

五月號



77.

ポストン文藝 五月號 目次

表紙 寫眞 (キャンパIIパー)

貴家璋造
蟹江米男

卷頭言

ポストン繪物語

久留島實雄 三

インセンス
拾ひあつめ

翠川敏 五
外川明 七

ポストン生活印象
吟詩漫筆
寶石の話

貴家志子 三
大岡周洋 六
新関惣太郎 五

山行記

有田縁 三
松本一滿 三
石丸九十九 三
重富初枝 三
羽根政春 三
芳川積三 三
伊藤四郎 三
有田百 三
松原信雄 三

詩と俳句

稍の祈り 青木伸 二
療養院にて 平八 四
生活断章 片山溪巖子 五
死 平田水村 七
流 牧さゆり 八
希望の彼岸 木内春波 九
四季時 半 十
生 花 十一
春 寒 十二
満座那吟社抄 島本巽村 十三

短歌

彌生歌會詠草集 永瀬勇 二十
選後隨録 島原潮風 二十二

柳川

添削講座 島原潮風 二十二
句會並互選 附シカゴ小句會 二十四

創作

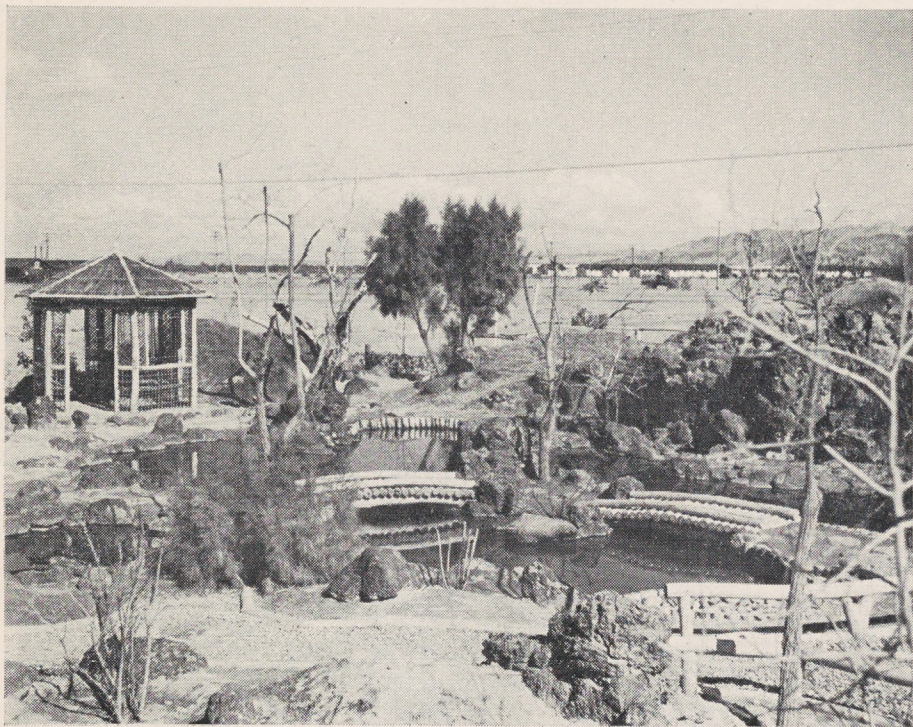
インデアンの廢家
松岡全權と博実「廣」

林元幸盛 三十一
芳川積三 三十五

編輯後記

カッ ト 板 進藤舟水 四十二
瀧井謹平





CAMP II PARK

卷頭言

青葉五月の旺盛な生命力は、時として自分の上に窒息しきうな
壓迫となつて、私を深い憂鬱の中に沈ましてゆく。此の強烈な生氣の
中に在て、一步を踏み出してゆく事の出来なない思想的苦惱を覚え、
渴求する高い統体に自己を誘導してゆく事の出来なないあがきをみる。

民衆の有機的な組織に成功した苦の獨逸が、今かく敗れんとする
ときそこに否定してきた唯物物的觀念にとらはれようとしてゐる自己
を見出し、今、又WRAの新方針の再転位に對する心攝へに確固と
した信念の出来なないことをうらむ。

人は多くの場合自分の環境から割出した狭量を利己的主觀に左右
され勝であるが、我々の理念の中から海外居住民に課せられてゐる
使命を考究し、民族の發展に焦点を置いて進むならば、何れの道に
ゆくも間違ひはないのではあるまいかと思ふ。深く世界を静思し、
眞理を究明し得るならば、輕拳に陥らず盲動にゆくこともなからう。
私はやうやく今日此の頃、貪しい自分の頭の中にそれだけのことを
組立て、ゐる。

梢の祈り

青木 伸

口笛で春雲を呼んで見る時もある
頭を掠めて過ぎる冷たい風の寂しさにたまらなくなつて――

がつと 無と空に耐へて 滲み出す緑芽を待つてゐる梢である。

三日月は弱々し過ぎる 夕星は可憐過ぎる それでも
暮と抱いて 夕闇に吸込まれてゆかなければならぬ楊柳の梢。

カラン カラン と牧牛の鈴の音がきこえて来る
雲雀も ロビンも 遠いところで楽しさうに囀つてゐるが――

伸び過ぎた落葉樹の 梢の寂しい胸中は誰も知らなかつた。

この土だ！ 草や樹を育んでくれる同じ地球の土が
無限に人衆争闘の鮮血を吸い込んでゐるのだと想へばたまらない。

燦々たる朝陽に 全身の若芽をふるはせつゝ、合掌し
朝な朝な 大空に平和を祈る 細くも折れない楊柳の梢である。

WELCOME
to
POSTON

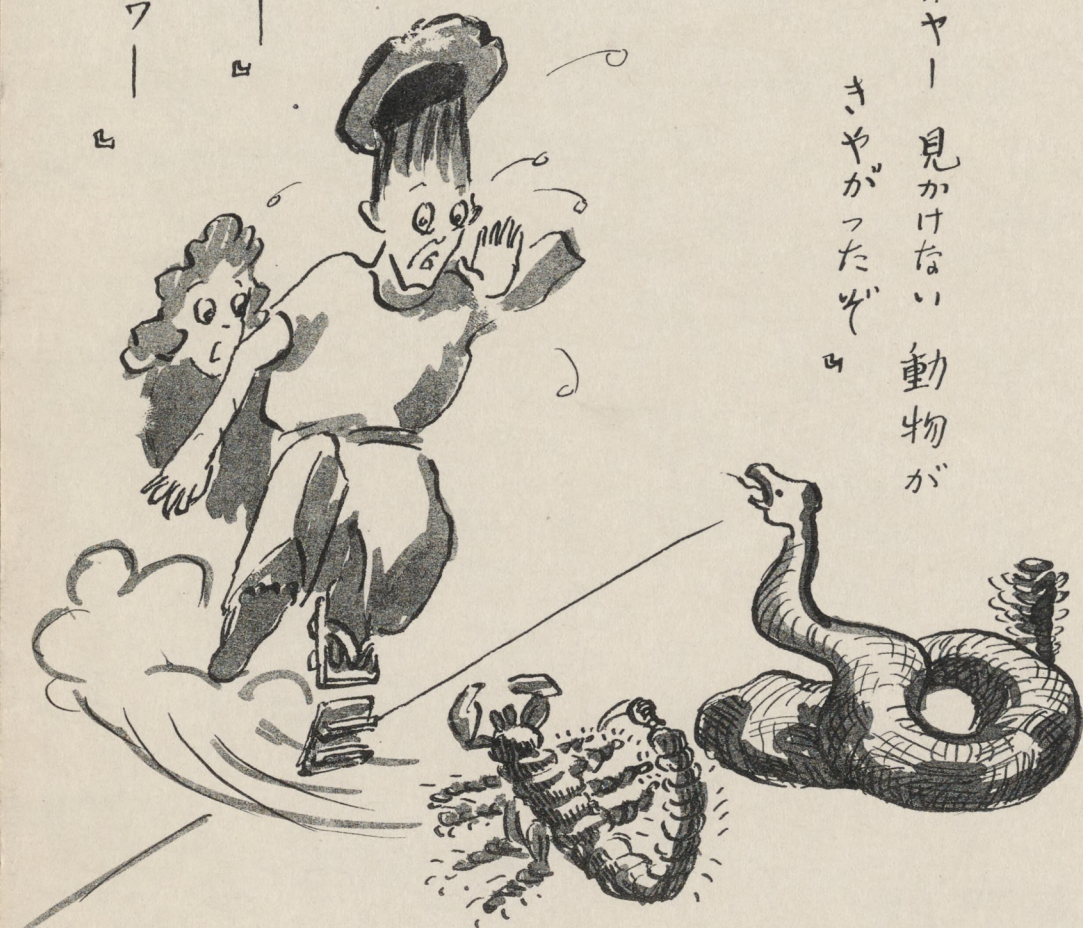


オット……見ては
不可せん！



オヤー 見かけない 動物が
きやがったぞ

ウヘー
ウワー



メソ
ホール
ライン

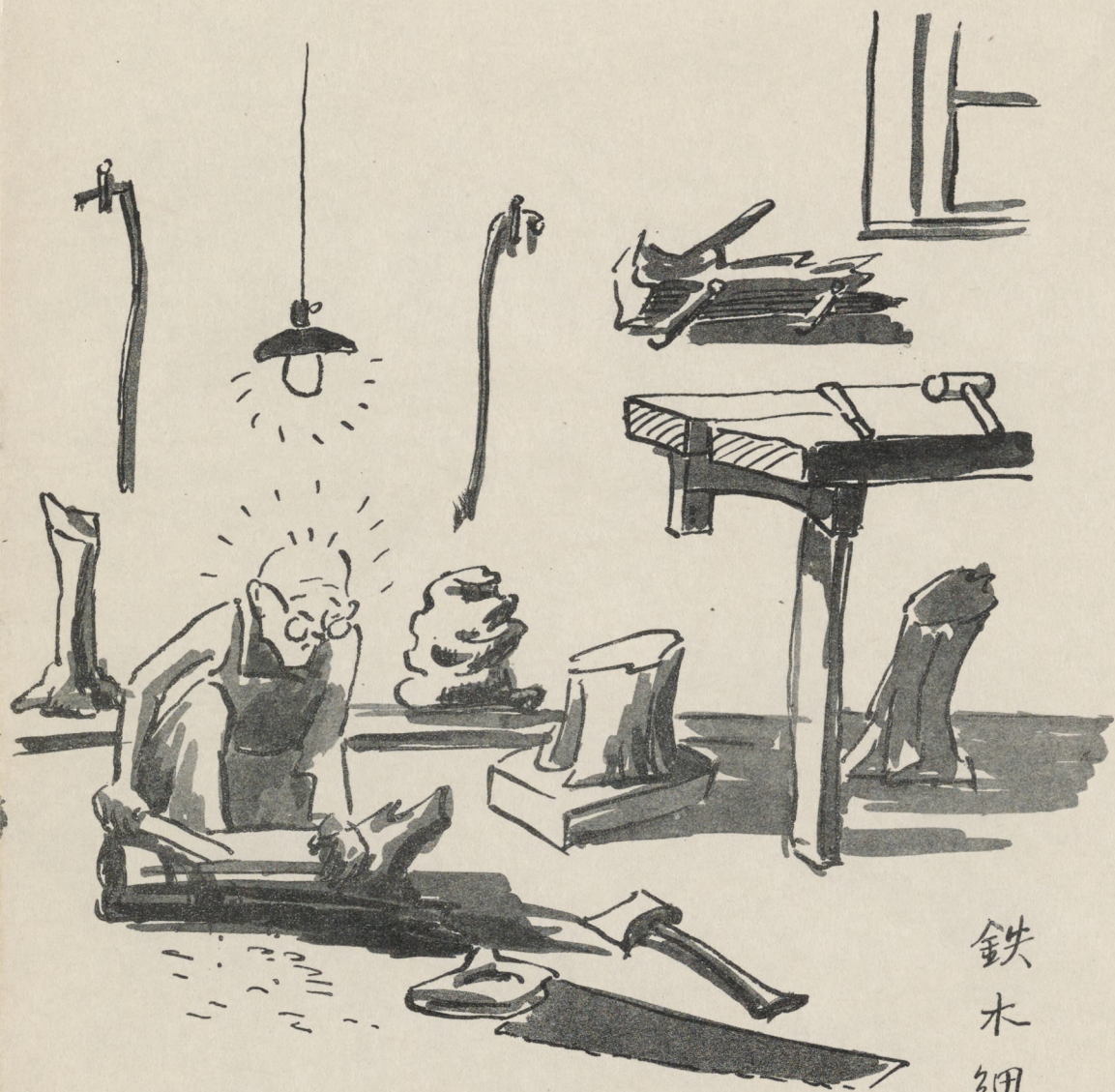


Nov. 18-24, 1942



火天下
十六弗行

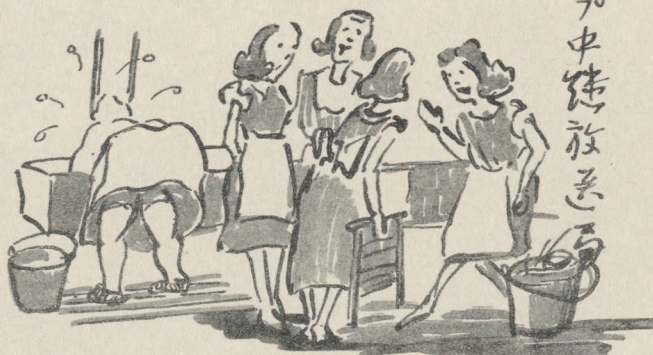




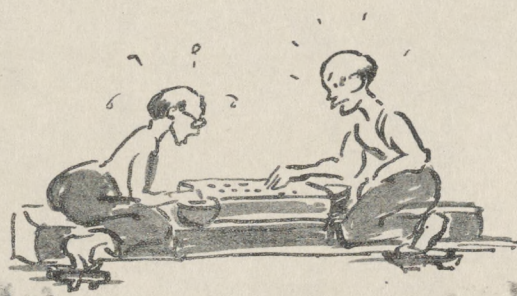
鉄木細工

石磨子





ガシラ中絶放棄



新潮

何時の日か

又あへるやうな事になる

淡い空み城もつ影一みに

なる

さようなら

さようなら



「インセンス」の話

・薫香のこと・



翠川敏

緬甸^{ビルマ}のサルウヤン河は 遠く源を西藏^{チベット}に發し「世界の屋根」とも云はれるヒ
マラヤ山脈の北側を迂回^{ウダウ} 素との國境を過ぎ マウルマイン港からベンガル灣
に注ぐ大河である。

バリトン歌手 ローレンス・テイベツトやパウロ・ロブソン（黒人）等が よく
アンコールに歌ふ「ロード ツウ マンドレイ」の マンドレイ公路は マウル
マインに始まり ベツクを経て マンドレイに至つてゐる。

太古幽邃^{スエ}なサルウヤン 風光明媚なマウルマイン 坦々^{タン}としたマンドレイ
を廣く歐米人の間に紹介したのは 印度ボンベイで生れた英國の作家 ラッデ
イ・アード・キツプリングが物した筆の魅力であつた。

サルウイン河と マンドレイ公路に挟まれる地域は 馬來半島と共に インセン

ス(薰香)の特産地として名が高い。随つて シンガポール(昭南) が而うであるやうにマウルマインは世界的な集散地となつてゐる。

x

x

紐育 マンハッタン四十丁目 五街から西へ一寸入つた北側(有名な市立圖書館の裏)に「オビングトン」と名乗るハイトンなデパートがある。あの建物は一九二〇年まで「AAヴァンタイン」の所有。京都の山中商會を大きくしたやうな骨董商を兼ねた東洋美術品を取扱ふ老舗であつた。日米間の貿易を長らくやつた人の記憶には未だ残つてゐるに相違ない。

一九二〇年(大正十年)は 前世界大戦が終局して夙くも萌された第一次の不況風が吹捲つた年であつた。横濱の豪商茂木(惣兵衛)が潰れたのもこの年まさかと思はれる内に「AAヴァンタイン」も遂に破産の憂目に會つて了つた。筆者も少額ながら被害者の末席を汚したので其の間の事情を覚えてゐるが、残されたものは 暖簾「AAヴァンタイン」を保持したこと、破産振りの好かつた評判だけと聞いて落膽した一人であつた。

一敗地に塗れた豪商「AAヴァンタイン」たる者 これからどうするであらうかに興味が掛けられてゐた所へ 紐育つ子を二度びつくりさせるニユウスが擴がつたのであつた。マツハッタンの對岸ロングアイランド市に立籠つて凡そ歐米人とは縁の遠いインセンスを造り始めたから――。

其の頃 日本から米國へ輸入されるインセンスは連年二百萬弗（関税の額）を上下してゐた。もつとも線香はこの額の中に入れてない。

現在のAAヴァンタインは化粧品まで造つてをり 米國內を行商するセールスマンの数が三百にも達してゐる点だけでも どれ程の商賣をしてゐるか？、凡そ見當がつくと思ふ。インセンスも決して馬鹿にならぬことが判るであらう。

とにかく 米國に於けるインセンス製造の先鞭をつけた譯。これは 畢竟

在米東部日本人を刺戟する結果をも生んだ。然し 物を造ることは難かしく手を出した人達は相當に苦しい年月を嘗めなければならなかつた。

故國へ向はんとする者が 友人の一人に「よし 本場で調べて来ませう。」如何にも偉さうな顔をして引受けたのは 其の苦難のドン底であつたやうだ。

京都は日本の薰香中心地である。年産額一千萬圓（昭和元年）を算へ 市が有つ重要産業の一つになつてゐる。

前に記した通り 香料は印度支那半島の特産で馬來と緬甸から高級品が出る。變り種は「鯨粉」と「麝香」。前者は南洋特産の鳳が海上に落したお粗末な代物の精製品。後者は同じく麝と稱する動物の體內の袋から採つたものである。この二種を除く他の何百種もある香料は凡べて植物性。地中深く數世紀に亘つて匿れてゐた埋木を發掘した物で 最も一般に知れてゐる香料は「沈香も焚か

ず屁もひらず」の沈香であらう。白檀 苗皮 等も知られてゐる。

日本へは凡べて華僑の手から香港經由で輸入され 大阪か神戸に沖渡しで陸揚げするのであるが 其の手續きが頗る振つてゐる。云ふまでもないことだが 香料の値段は芳香でつけられるのである。所が 譬へば 一口に沈香と稱しても同じ芳香を發酵する譯ではなく 品物それ／＼に由り違ふのだから大變である。船が着くと日本香料組合の人が出張して入れの上沖渡しとなる仕組となつてゐるが 廣い日本に嗅ぎ分けが出来る鼻の持主は たつた大阪心齋橋通り「伊藤仁壽堂」の徳兵衛翁だけが残つてゐたと云へば 讀者は驚かれるに相違なからう。然し 事實であつた。其の徳兵衛さんも今は過去帖の人になつたと思ふ。何故ならば 筆者が會つた二十年前 既に齡七十九であつたので。

話は横道に外れたが 陸上げされた香料は組合に入つてゐる全國の薰香屋に配布され 各店家傳の秘法で調合し 其れにボデイを混成してインセンスや線香か造られることとなる。ボデイとなる物（日本では）は大分縣の特産「楠」と云ふ木材を精製した無煙無臭の炭である。楠は和歌山縣にも少しは出る。

楠を混成するのは 香料の値段が非常に高いことの他に大きな理由がある。それは近代人が薰香を燃やすやうになつたからだ。

薰香も矢張り支那（唐の時代）からの渡來品 日本で普及され其れが最高潮

の域に達したのは 足利三代將軍義満から八代將軍義政に至る時代であつた。
日本文化の全盛期 絢爛ケンランの極 平淡タンに入つた室町時代には 燦戰センと稱した催
しが宗匠の間で盛んに行はれたものらしい。讀んで字の如く燦戰とは燦す試合
である。諸流派の宗匠が各自調合した薫香を持寄り 小型の火鉢のやうな容器
の上に「枚皮マイカワ」を置き其の上に香をのせて燦すのであるが 現今の茶道以上に
嚴肅裡に催されたものと見える。枚皮は雲母ウンモのことである。

奈良の正倉院に收められてゐる「斑麝羅香ハンシャロウカウ」は 畏くも日本皇室の玉香 御
卽位式に際し歴代の天皇が高御座ミクラにお上り遊さるゝ刹那 紫宸殿上で燦し奉つ
たもので 芳香は遠く三條の大橋までも匂へたと記録する古い文献も遺つてゐる。
桃山時代までは 上は皇室から下は萬民に至るまで 各家傳來の香を冠婚葬
祭に當つてそれぐ燦したものであつた。

科學の進歩に伴ひ 宇宙萬物に簡易化が施され 其の前には禮儀も何もあつ
たものでない現代人が 今日葬儀の際に使用し恬テンとして憚ヒヤシからない所謂「お香
料」なんて物も 畢竟はそれが成れの果の一つとも思つて差支へない。

くどいやうだが 今一度云ふ。インセンス（薫香）は燦す（エバポレート）
もので燃すものではなかつた。燃やすやうになつたのは徳川時代中葉に和蘭人
が試みた悪趣味を真似たことに端を發してゐるのだ。

曾て日本人が使つた「オリエンタル」なる言葉は 東洋的と云ふ意味に於け

るよりも 西洋人が東洋に對する幻影を逆輸入した意識に驅られて發した場合の方が多かつた。東洋趣味の真髓に觸れるには 物を燃やしたのでは味へない。燻さなければならぬのである。日本人の間にも西洋人の輸入趣味を逆輸入して所謂オリエンタル氣分に浸つた時代があつた。

インセンス・バーナーは西洋人が造つた物 東洋人はインセンス・エバポレーターを使用しなければ 東洋の匂ひは本當には味へないのである。

燻すやうに造られた物を 燃やすやうに調味して賣捌いてゐた米國東部のインセンス屋さん達が 燃やすやうに造つた物に 燻して味へるやうな芳香を加へんものと焦り出したのは一九三〇年も過ぎかけた頃であつた。

x

x

緬甸に入つたサルウ牛ン河はイラワドウ山脈の大溪谷を分けて流れる。夜陰に乘じ舟筏を驅る緬甸人は幾千年の久しきに亘る神秘的な芳香に酔ふと云ふ。

キツプリングがキツチイナーに隨ひ 洒然としてサルウ牛ンを溯つてより既に半世紀 壁畫の如き奇巖断崖を眺める詩情畫意は今もなほ神韻渺々として紙幅に動きヒモト繙く者をして巻を措くに忍びざらしめざるはないが――。

「東は東 西は西……」と吟誦した遊子 果して「燃やすのではなく燻してこそ初めて覺ゆることが出来る」東洋の匂ひを味つてゐたであらうか――？
折に觸れ疑はれて仕方がない。

断想

拾ひあつめ

外

川

明

今頃になつて漸く出来上つた私の机、作つてくれた人は、其腕前キヤンプ第一の定評ある私と同じ部落のK爺さんだ。何も載せてない新しい机の上に原稿用紙をひろげて、芭蕉翁の簡素な机上を偲んでゐる。

『乞ひあるく水音のどこまでも』亡くなつた種田山頭火の自律の句だ。求める詩の爲には、私の心も常に彼と同じやうな乞食になる。

『生やさしいことぢやない、詩とは、思想の奴を地上に突き出すことだ。』何時ぞや、評論家の新居格が何かに書いてゐた言葉が頭に浮んで来た。實際、魂を削るやうな思ひをしなから、廿餘年拙い詩を書いて来た自分である。

華道学校の春季生花展を観る。私達の視線のとゞく限りの草を木を花を蒐めて、各自が個性を發揮して活けてゐるのが嬉しかった。珍奇必ずしも藝術品で

はない。平凡な身邊の草花でも一本の樹の枝でも、又日用品の器の一つでも、使用する人の心次第で、立派な藝術品に爲し得ることを如實に示してくれた。生憎の停電に、燈の光線を失つたことも、却つて、薄暗い奥まつた日本の床の間を偲ばせ、背景と仕切りに用ひた無垢の白紙が、障子のやうな落着いた感じを與へて、心は自ら和んで來た。二百以上もあるだらう作品の一瓶一瓶に、川口靜洋校長の息のかゝらざるは無いと思ひつゝ、黙禮して歸つて來た。

枝々にビツシりと澤山な桑の實だ。淡い郷愁が春雲の彼方へ流れてゆく……人通りの多いこの路傍に、桑の木を植ゑたのは一体誰か？……

『寒いから皆に十分オイルをやつて下さい。心配しなくてもオイルだから』咽喉もと過ぎても忘れちゃ濟まないオイルクルー主任H・Oの温いあの言葉。

『胃が悪いですか』と一婦人が訊く。色々御説教をされないやうに豫防線を張つて、『胃が悪いのぢやないのです、心が悪いのですよ』と逃げたが、その婦人尚も口をつぐまずして謂ふ。『胃病とは、謂病であつて、自分の謂ふことのみを押し通すことださうです』と……チクリと針の如くに痛かつた。がもう一人の頭の先げた恵比壽顔のHさんの言葉が好かつた。『断食をすること』

す。生長の家の断食が一番良いですよ。食物と云ふ物質は本来無であるから、無である食物を何でも食べるのが生長の家の断食法ださうです」と。

風も止み、曇も晴れたい天氣の日曜日だ。朝から近所の人々が元氣よく茸採りに出かけてゆく。こないだも友人のMが、『僕は美味しい物を食べて死ぬなら死んでもいい』と云つたが羨しいと思ふ。私は未だ食道樂になれない。欲しいものは魂の糧、食物は與へられる物を何でも悦んで食べてゐる。

ものは思ひやう、悟りとは心の持ち方一つか。四人の通學児童も、吾兒だ。自分の所有物だと思ふから學校閉鎖問題が憂鬱ウツになつて来るのだ。子供は自分の所有物ではない、この國の政府の所有物だと悟つて一切を委せてゐる。

『忙しい／＼！たゞ氣のみ忙しくて自分の仕事は何にも出来ない。』

私よ、咳くことは止めやう。ブラックマネヂヤー、イコール 住民の小遣——それでいいぢやないか、『生命の實相』の中には次のやうに説明してある。

『忙しくて自分の時間がないと云ふ人があるが、忙しいのが自分の時間ではないか。』と、又、『損だと思ふな。損だと思ふ心が自分を傷ける。損だと思ふ心が自分を損させるのである。』と。

——一九四五・三月廿五日記す。

ポストン生活印象

(八)

四十三年度前半期

貴家志ま子

種々の問題の常に絶え間の無いこの轉住所に、千九百四十三年を迎へ初日は麗かであつたけれど、合はす額毎にお目出度ふを言ふのは餘りそぐはない氣分であつたのである。此日食堂には着飾つた少數の婦人等も見え、スーツに着換へた男子らもあり特別の元日の馳走は卓上に並び、部落長はそこで元日の辞を述べたりした。

一月へ入つてから部落内の主なる協議事項は、カモフラージ ネットの働きに就てであつた。

二月になつて日系兵士らはキャンブ訪問を許されるやうになり、曾ての外部のホームから召集された軍服兵士の姿が、時折そここのバラツクの道などに見えた。市民権を持つ男子、十八歳から三十八歳迄の住所名簿の調べが始まりこれに次いで二月十七日には、部落四のステージで十七歳以上の男子市民大會が開かれたが其の時、John BOLTON中尉は男子兵役適齡者登録に関するスピーチを行ひ、日系市民の太平洋沿岸退去に就いて、日米國交の危機に際して起つた一大難問題とされて居た所の、日系市民の忠、不忠誠の問題を急速には解決する能はざりしにより、應急政策として政府は遂に日系市民の收容

を餘儀なくされたと云ふ事を、同情的且つ辯護的に述べられたのであつた。この中尉が各セクターを巡歴し講演するやうになつたのは、政府が或規定の改正を行はむとするに當り、それに對する日系市民に新なる決意を要望する必要に迫られて、この擧に出でたと附言された。斯くして日系市民も他の市民と同様に、其資格及び負擔さるべき重要な義務を果すことに依つて、忠良なる市民なる事の實證となり、同時に國家もそれらを深く認識するのであつて、斯くされるやう望むに先だち米國の爲に戦つて貰ひ度いと云はれ、且つ此際に陸軍へ自發的志願兵となる事の出来得る機會を與へ、現在の兵役任務を一般市民に同等に及ぼさんとする政府の政策に付いても色々に述べられた。終りに日系市民獨立の戦闘部隊の組織などにも言及して質問書を市民へ配布した。これに依り日系市民は轉住所内で徴兵さるゝ運びに至つたのである。かくして一方には各各の立場を異にし或は各自の思想の相違などから起る幾多のもつれは、益々綾の乱れし如く入り組んで來たのである。

二月廿二日當ホストンより出發する日系陸軍兵士等の爲に、ファイヤー・ステーションに於てダンスの催しがあつた。婦人陸軍の方もWACから勧誘の爲に人が出張して矢張りスピーチがあつたのである。所長ヘード氏からもこれを援助する趣意に基いて、住民に向け一片の印刷物が配布された。

三月に入りては赤十字基金募集があつた。赤十字ホストン支部の創立は四十二年九月一日で、支部の仕事としては應急手當講習部、水泳講習部及び五ヶ所の水泳管理部とライフガード、家庭看護講習部、公衆衛生部、外國通信部、災

害救助部、工藝奉仕部などで、数多の役員と事務員を置き、尚其の上事業の擴張を目録みてゐた。

部落ニへはインディアンが数名入つて来て、子供等を馬に乗せて遊んで歩いたり夜おそく入つて来る事などをしてこの頃問題にして、警察を頼んで部落へは入らぬやうにして貰つた。

學校校舎は未だ成らず各部落から順々に手傳ひに行く事にしてゐた。前年この學校建築に當つてアドベ働きと云ふのが初まり、男子に交つて数多の老若の婦人もこの泥を固める仕事に通つてゐた當時の有様も、轉住地建設中の最初の職業の一つとして印象深く、これに伴ふ幾多の事柄を想ひ出されるのである。

三月に至り全住民の市勢調査が初まり、十七歳以上の男女悉く質問に答へ、それらは總て登録紙に記載され、この記載の項目及び質問数全部で三十三項に渉り、この調査は各部落一齊に行はれた。この月末にポストン憲法が七章五十一條に分たれて作製された。若し此の憲法の條項に住民が異議を唱へたい個所を持つた場合は、其旨を申し出るやうにとの事であつた。

四月に入つてから基督教徒のイイスター サンデーの催しは何となく神々しいものに思はれた。ほのぼのと明け初めた廣原の沙漠ツバきのメスキッドツリイの林より復活祭の讚美歌の聲が、やゝ近く又は遠くなりツツ聞えて来る。私は偶然に復活祭の早朝その近邊を歩いてゐた折、立ち竝ぶ古木の隙間から焚火の焰がゆら／＼見える傍に、人々の黒い陰が集まり合ひ、そこから唯説教の聲ばかりが静寂なあたりへ響き渡つてゐた。これを都市の高壯な寺院などで行

ふのに比較して、何と復活祭にふさはしい崇高のさまであらうと思はれた。それはこのやうな土地で斯様な生活におかれて居なくては、出来難く且つ味ひ難い事であると感じたのである。

四月から六月までの食堂に於けるアナウンスメントの中の数件を、茲に採録する。魚釣りにはライセンスを貰はないと行かれません。ライセンスは一弗七十五仙です。

四月二日、家の側の日除は以後作る事を差止められました。これは火災の折に水が不便の爲、家を壊して火を防ぐ場合に邪魔になると云ふことです。

四月六日、トメトの苗が来しました。事務所へ取りに来て下さい。

四月十一日、小児麻疹病が流行して来しましたから、コロラドへ行くパーティットは出しません。

四月廿日、バーソープを一人に一個宛上げます。事務所へ受取りに来て下さい。食堂のカップが足りなくて困りますから忘れないやうにお返し下さい。

五月五日、カモフラージ、木ツトの積立金が一万七千弗あります。之に就て市参事員會にて分配法を協議いたしましたして、四提案が擧げられました。今朝のポストン、クロニツクルにそれが出て居ります。能くお読みになつて八日の晩のマスミイテイニングにお集り下さい。四提案の内の何れが良いかを決める事にいたします。

六月十一日、教師の謝恩會が部落四のステージに於て午後七時より開催されます。出来るだけお出下さい。

吟詩漫筆 (六)

大岡周洋

應制の體

唐は所謂詩の黄金時代にて、詩の諸體を具備した詩聖杜甫、謫仙李白の出したのも此時代であつた。

沈佺期、宋之問、唐初に於て首として應制の體を創し、雄麗瑰偉千古に冠絶す。

奉和聖製從蓬萊向興慶 王維

閣道中留春雨中春望之作應制

渭水自縈秦塞曲 黃山舊繞漢官斜

鸞輿迴出千門柳 閣道迴看上苑花

雲裏帝城雙鳳闕 雨中春樹萬人家

爲樂陽春行時令 不是宸遊玩物華

(三六)

唐の玄宗が蓬萊宮より興慶宮に行く複道中、留春閣に憩ひて雨中春望の詩を作られたるを、王維が詔に應じて和し奉りしなり。制は詔なり。

渭水は溶々として秦塞を廻つて紆曲して流れ、黃山は舊に仍つて漢宮を繞つて斜に連互してゐる。渭水黃山はもと秦漢の景勝の地であるが、風景は今も昔も變らず、さて天子の御車は廻に千門の側なる宮柳の外に出で、複道上から上林苑の花を見返りながら、徐ろに進み給ふ。(以上二句近望の景を敘す) 又遠く望めば雲間に鳳闕の相雙びて峙つあり。烟の如き細雨の中に、樹木が點々と茂つてゐて、萬戸の民家が其間に散在して、帝都の人烟稠密のさまを一目に眺むるのは、實に楽しき御遊幸にぞある。(以上二句遠望の景を敘す)

して、畫手も及ばず）されども天子が今日の御出遊は、陽春の時氣に乘じて、民に農桑を勸め、又仁政を布き行はせ給はんとお思召に出でたる爲にて、徒に春の景色を賞め玩ばんとお趣意にてはなし。七八二句、規諷の意を寓して結ぶ。此詩は、唐人應制の詩の中に、最も體に合ひたるものなり。

春日山莊應制

有智子内親王

寂々幽莊山樹裏

仙輿一降一池塘

棲林孤島識春澤

隱澗寒花見日光

泉聲近報初雷響

山色高晴暮雨行

從此更知恩顧渥

生涯何以答空蒼

有智子内親王は嵯峨天皇の女、弘仁元年加茂の齊院となる。帝齊院に幸し、

花を賞し宴を開き、群臣をして春日山莊の詩を賦さしむ。内親王時に御歳十

七。

孤島、寒花、（内親王自ら比して云ふ）

此深樹の裏なる淋しく静かなる山莊の池塘に、一度仙輿の降れるは誠に光榮の至なり。されば林に棲む孤島も春の徳澤を知り、谷間に隱るゝさびしき花も太陽の恩光に浴するを得たるは、何等の幸慶ぞやと、春澤、日光を天子の恩眷の厚きに比して謝意を表し、さて我が山莊は泉聲近く聞えて初雪の響くかと疑はれ、山色は高く晴れて麓には暮雨の列るを見る。此自然の景物は聊か天子半日の游豫に供するに足らんか、已は爾今以後更に恩顧の優渥なるを感ずることなるが、畢生何を以てか此天恩に奉答することを得んかと。十七歳の公主にして、才藻の美なること此の如し。鬚眉男兒なる者奮勵努カせよ。

奉和春日出苑囑目應令 賈曾

銅龍曉闕問安廻 金輅春遊博望開

渭水晴光搖草樹 終南佳氣入樓臺

招賢已從商山老 託乘還徵鄴下才

臣在東南獨留滯 忻逢睿藻日邊來

賈曾是河南洛陽の人、玄宗東宮に在

る時、太子の春日出苑囑目の詩を寄せ

て和を徴せられしに因り、令に應じて

作りしものなり。天子の命を奉じて詩

を賦するを應制と曰ひ太子の教を奉ず

るを應令と曰ふ。

銅龍の句は是れ太子出苑の根銅龍の

門、曉に當つて闕けり。他なし。父皇

が問安の爲に出でて宸闕に朝するなり。

此の如くにして出苑は是逸豫の爲なら

ざるを見る。その立言の妙自ら一代の

定式たり。金輅の句は是れ春日囑目の

由、太子の車今は廻り来れり。苑外の

春物駘蕩として人を勤かす。囑目の中

詩興盎然として生じ、懷に觸れ情を抒

べざるに已む能はざるものあり。渭水

の晴光は澹として草樹に搖き、終南の

佳氣は鬱として樓臺に入る。是即囑目

の景。太子固より光景に留連して歸る

ことを忘るものに非と雖、此風光に對

しては金輅を停めて暫く坐賞せざるを

得んや。以上春日出苑囑目の正文なり。

然れども「博望閣」の三字の中、亦自

ら後聯太子の諸賓客を領起す。

抑々太子の英明なる、賢を招きては

已に老成練達、商山の四皓の如きを左

右に隨從し、才を徴して又、絳童藻麗

鄴下七子の如きを後集に託し、此輩と

知識を交換す。當時太子が囑目の作一

度成つて、此等應令の才儒、雲の如く

想像に餘あり。而して自己は太子舍人

として東南洛都の故郷に留滞し、遺憾何ぞ堪へん。然るに今忽ち日邊の膏粱、遙かに長安より垂示の榮を蒙る。我が菲才を以て、太子が招賢徵才に急なる、安んぞ欣然として令に應じ一篇を奉和せざるを得んや。

商山四皓は東園公、綺里公、夏黃公、丹里先生鄴下七子は孔融陳琳王粲、徐幹、阮瑀應瑒、

劉楨―曹植と應教の作

魏の文帝の弟曹植西園を鄴都に設け、七子以下文人才子を此に集めて詩を賦せしむ。西園應教の作層見疊出す。天子の弟其他天子一門の教に應じて詩を作るを應教と曰ふ。

陳思王七歩の吟

魏の文帝の弟東阿王の陳思は博學で詩才に長じて居たので陳思王と云はれ

て有名な人だが、此人が曹植と云はれた少年時代、兄の文帝と仲が悪くいぢめられ通しであつた。或日兄は「七股歩く中に一首を作つて見ろ、出来なけや重罪を與へる。」と。曹植は泣く／＼

一歩々々小さき足を運び、

煮豆持作羹

漉豉以爲汁

其^{マカス}在^リ釜底^ニ燃^エ

豆^{マカス}在^リ釜中^ニ泣^ク

本是生同根

相煎何^ニ太急^{ナル}

と云ふ詩を作つた。豆を煮て羹を作るのに、其を薪にして燃やす。其と豆は同じ根から出たものなのに、豆は釜中で其其に煮られて居ると、兄弟の仲の悪いのを喩した。文帝は此詩を見て自分の行を恥ぢ以後兄弟仲よく暮せりと。

(完結)



宝石の語

二

新聞惣太郎

初めエジプト人はナイル河の邊に居る小さな甲蟲を型取りまして、泥で作るそれを固めて金屬性の指輪の背の方に細い針金を通して縛り付けて用ゐて居たのであります。指輪に石や其他のものを嵌めると云ふ事は皆エジプト人の發明であります。何故古代エジプト人は

此の甲蟲

を大切にしたかと申しますと、SCRABOUES SACRE と申しまして、此甲蟲に依つて古代エジプト人は「生と死と來生の希望」とを

與へられたのであります。古代エジプトの宗教的基礎となつたのであります。此の甲蟲がナイルの河邊の柔かい泥の中に卵を生み、さうして夫れを保護する爲に丸い形に丸めて次の孵化する迄待つたのであります。實に此の甲蟲こそ古代の人々に人生の不可解を解決する好き暗示を與へたのであります。其結果彼の偉大なる文明と宗教の基礎とを致さしめたのであります。

此のリングは又一方エジプト人の印鑑ともなつたのであります。必要に應じては（紙の發明は未だなかつたのでありますから）泥や蠟を以て封じ、夫れ

に彼等の指輪を以て押付け封印としたものであります。東洋諸國で見まするやうに、昔の文明國の間にも此の印判の大物であつた事は歴史上明かな事であります。殊に王者に取つては大切なものであります。聖書の創世記四十一章を見ますと、ヨセフの指に當時エジプトの王であつたパローが自ら自分の指輪を與へたと記されてあります。又列王記の上二十一章を見ますと惡妻イザベルがアハブ王の印を濫用して大罪を犯し、ダニエル書六章にはダリヨス王が其指輪を以て獅子の穴を封印した事が載つて居ります。何時の時代でも左様であります。昔エジプトの

富豪達

はダン／＼此スカラブの指輪は土や焼物では満足できず、水晶や瑪瑙、又は紫水晶等に変つて参りました。夫れのみならず其甲虫の背に、エジプト人の挨拶の習慣用語、「凡百の花、貴家の上に年中絶へざる事を祈る」と云ふやうな意味を刻する迄になつて参りました。

然する内に必要に應じて色々の金屬性の道具が發達いたしました。愈々硬い美しい寶石を磨く事に成功いたしました。六角のエメラルドや色々の美しい寶石が用ゐらるるやうになりました。首飾や指輪を作り、又富豪の婦人達は黄金に眞珠の入つたもの、或は前記スクラブ指輪、ベルト、腕輪、耳飾等凡て寶石入を用ゐ、而して此時代から髪にはブロンズのヘヤピンを用ゐるやうになりました。

一般民衆も亦一種の新流行として、自分の妻の手に一個の指輪を必ず與へる

習慣になりました。其意味は「爾後一切、我家の事は妻に一任する」と云ふ事であります。此エチプト人の習慣を第九世紀に至り基督教會に採用しまして今日の「結婚指輪」と云ふものになつたのであります。そして「結婚指輪」に特にダイヤモンドを使用すると云ふ事は、古來ダイヤモンドは不変の表象と信ぜられて居つたからであります。

アレキサンダー大王

がアジア征服を終へまして、マセドニアに凱旋いたしましたのは、キリスト紀元前三百廿四年でありました。夫れより五日の間、凱勝記念大祝賀會が開かれました。さうして將軍初め八十名の士官も招待に預かつたのであります。此の若い士官連は遠征中ペルシヤに於て結婚した新嫁達を皆携へて出席したのであります。何れもペルシヤ傳來の服裝にトークナス、眞珠、エメラルド、ルビーから色取々のスピネルと云ふやうな寶石類、其衣服は申すに及ばず頭髮から足の先迄飾り立て、参加したのであります。之が又當時の文明ギリシヤの大評判となりまして、遂に東洋風の大流行の基となり、寶石の需要は彌が上にも昇つて参りました。

之より後、印度とヨーロッパの貿易が一段と盛んになり、當時の全世界に寶石熱が高まり、之に伴つて金銀の裝飾品も進歩發達いたしました。首飾、ペンダント、指輪、耳環、腕輪等の流行は益々盛んになつて参りました。

昔の市民

は悉く鉄の指輪を嵌める習慣になつて居りました。之はローマ人として自由の市民であると云ふ証據であつたのであ

ります。そして時の政府が他に其の大使を遣はす時には特に黄金の指輪を嵌めて行かせました。勿論使命を果して歸つた後には又元の鉄の指輪に變つたのであります。

有名なシーザーの將軍ポンペーが小亜細亞を征服してローマに凱旋しました時、ポンタスの王ミウリデーテスの秘藏の寶石類を分捕品として澤山持ち歸つたのであります。之がローマに及ぼした影響は非常なもので、男も女も全ローマ人悉く寶石狂と變つて終つたのであります。その結果、中指を除く外凡ての指の併も各関節毎に、指輪を嵌める事が流行いたしました。

さうして夏は細味の指輪、冬は分厚の指輪と云ふ具合に石も亦、サファイヤ、エメラルド、ルビー、オーパル等凡ゆる美しい寶石が世界各国から集つて参りました。乍然、之は一部貴族や富豪のみの事でありまして、一般民衆は矢張り今日も同じ事、十仙ストアにあるやうな色ガラスの玉の入つた安物で我慢して居つたのであります。

中世紀

に於ける寶石類は殆んど貴族や高僧の獨占とも云ふべき有様でありまして、寶石商の第一の御得意は云ふ迄もなく時の教會でありました。又貴族達も衣類を初め其の帽子、佩刀から靴、脛當、其持物は馬の鞍に迄も全部寶石盡しであつたのであります。そして特に紫色の寶石は高貴の表象として王侯、高僧のみに依つて用ゐられ、ローマ法王廳に於ては法王初め緋の衣と稱へらるゝ七十人の長老の間にのみ用ゐられて居つたのであります。

我日本

に於ける寶石の歴史は餘り明白ではありません。只上古時代に曲玉管玉等の首飾りが一部高貴の方々の間に使用せられてあつた事は明白であります。其後奈良朝の時代に陸奥の國から水晶を獻上したと云ふ記録がありますが、大した發達は見受けられません。只鼈甲とか珊瑚の如きものが高價の裝身具として用ゐられ、水晶や瑪瑙は宗教上の器具又は裝身具として幾分發達して参りました。

近來、指輪と云ふやうなものも大流行いたして参りましたけれども、之とて何時の時代から用ゐられたのか一向私には判りません。乍然之は確かに「異國の風習」であると云ふ事だけは判るのであります。左様に考へて見ますと之は恐らくスペイン、ポルトガル人の來朝後でなくてはなりません。自分の知る範圍に於ては史上に見た事はありません。或は極少數の人々の間に用ゐられて居つたかも知れませんが、丁度時代は足利時代の末葉所謂戰國時代でもあり、續いて切支丹禁制の令と徳川氏の天下となつた後にも驕奢禁止法令が再三出て参りました爲め、一般民衆には到底及ばぬ事であつた事と思ひます。併し何と云ふても徳川三百年の太平は次第に爛熟して其高潮に達した「文化文政」の頃は相當社會に流行したのであります。

櫛は縁切り、かんざし形身、指輪は當座の縁つなぎ。

と云ふやうな俗歌が流行して居つた事に依つても伺はるゝのであります。何れにせよ、日本の歴史に於ては最近の流行のやうに思はれます。



山行記

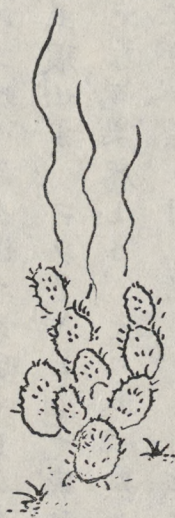
駄馬の登山

有田 緑

どんよりとした春霞ならば氣も浮き
立たうものを——。此處數日は、名に
負ふホストンのダストストームではな
いかと危ぶまれる。その上血腥ぐさい
陰惨なニュースに、ヒステリー症状で
はないかしらと、自らを怪しむ事さへ
ある今日此頃。

男の政治は飽く事知らぬ物質慾と、

記



極端な支配慾と、名譽心より来た、非
人道政治だ——。と反抗したくなる。

途方もない思案を廻らしては、憂鬱
になつてゐる折柄、

「明日登山するのだ。正木翁からち
稻荷を頂いた。お伴仰せつけても良い
がね……。之を料理さへすれば……」
と夫はいと朗かな、しかも猶太人式
交換條件付の口調で言つた。

實は生花の材料採りに、あの谷へカ
クタスを——。そしてあの木を、あそ
この丘陵にと、心組してゐた矢先なの
で、渡りに舟、イの一番に鉄と紐を袋

に入れて知らぬ顔。

十幾名の一行の内、初枝様、花子様、綾子様、久子様、の諸嬢は瀟洒で、華やかな、そして粹な出で立ち——。双

頬は張り切れ相な天津乙女の艶姿——。

我は——。我が穿つたのは古びたスラ

ークに面貌の枯尾波、嗚呼——若かりしなばと、自ら感ずる程なれば、人様の目には如何に映るらむなど、いささかの悲哀感なきにしもあらず——。

心も澄める朝風に、山路を分けて行く程に、登る程に、大きな谷を横切つて八十五度の傾斜を攀ぢ登る。ころころと滑り落ちては大變と、足の悪い夫に手を出して扶けやうとすると、「ウム……何——」と言つて手を振り切り、チラリと一行を見た。男性は妙な處に片意地を出して見たり、見榮を張る者

だとはんと可笑しかつた。でも轉げ落ちはしないかと案じては、登り上るまでじつと見詰めて居た。

女性是人知れず何處まで——幾歳まで——人の爲めに心痛めねばならぬのかしら——。

綺麗だなあ——。可愛のね——此の

花は——。とあちこちでの嘆聲。總じて沙漠の花は濃厚な色彩を有し、優にやさしく、高雅で美しい。又植物にはほとんど刺を有してゐる。私は沙漠の花は日本婦人を象徵してはゐないかと思ふ。あの炎熱焼くが如き日も雄々しく、露の玉結の命を保つ忍耐。しかも自我を主張せず、コツ／＼として家庭の犠牲となる奥床しさ、その上凛然として犯し難き操の刺を保守する。私は沙漠の花の禮讃家となつた。

松本様、松原様の壯快なる朗吟の音波が沙丘から谷へと渡つて行く。歌好きは私はしばし佇んで聴き入る少時もあった。

知己様、花子様、久子様も、お母様の爲めにお生花の材料を手土産にとの孝行振りには、さすが大和民族の血は争はれぬものと感じながら……では、お手傳ひさせて頂きませうと、餘念もなく彼れや此れやと、材料の採集に多くの時を過してしまつた。

ふと、あたりを見廻すと先行の方々の姿は見えぬ。石丸様の仰せでは、あの岩山の麓を左に傳つて、あのポイント邊りから、降りる豫定との事であつたので、では此の邊りでお待ちしやうと、きれいな花をつけた、カクタスの荷造りをした。待てども、先行の方

々の姿は見へぬ。四人は一行と別れたまゝ、自由行動を執ることに一決した。大谷の馬の背中の様な行き詰りの所に来た時、若い三人の方は、何の苦もなく七八十尺の谷底めがけて滑るかのやうに馳け下りた。私は勇を鼓して、蟹の横ばいの様にして降りたものゝ、腰から膝下の神経が、かくり／＼と、何時迄も恐怖の戦ぎをしてゐた。

若人の足取りの速さ——、學生時代には登山に、運動に、餘り人後に墜ちなかつた、古強者の我ながら、駿馬も老ひては駄馬の例へ、汗馬に鞭を上げつゝ、進めども、仲々に難澁の急速度の行軍であつた。

駄馬には駄馬の道連れとつく／＼感じた。

△

△

東の山は呼ぶ

芳川積三

東^春酣に、陽光燦々として降りそゞぎ、
小鳥の鳴く聲はいと長閑に、名もなき
草花は春風に薫をのせて野山に人を招
く彌生半、何んの風情もなき東に聳ゆ
る岩山も、今日此の頃は鬼も十八、番
茶も出花か、捨て難く見やるに呼び寄
せられ、浮氣者十数名、ついふうく
と出掛けたのはよけれど、遠く又近く
見やる麓まで、辿り着く迄に、一同始
めの元氣は何處へやら、ふうくはあ
はあ溜息を漏らし、麓に坐り込み、口
ばかりは達者に山の姿を彼れ是れと褒
めるばかり、其の胸甲斐なき言はん方

なし。然りとは後で人に聞かれては、
面目丸潰れと、緊蹕一番、日頃自慢の
健脚に一鞭くれて、峻崖を攀ぢ登り、
頂上を極めたのは遠からん者は音にも
聞け、近くは寄つて目にも見よ、五九
の住人芳川なり。お手前味噌ではなけ
れど、峻崖絶壁は登りより、下りが危
ふ御座るぞ。

叔ても、やつがれは意氣揚々と、麓
に待つ連中に自慢の鼻轟めかしてやら
んものと、下る路邊に今を盛りと咲き
誇るカクタスに魅せられ、思はず駈け
寄つて、其の一株の根元に手を掛け、
引き抜いたはよけれど、美しきカタ
スが持つ、眼に見えぬ無数の質のよく
ない棘にしてやられ、全身ちくくとし
痛痒く、其の心地の悪さ、折角頂上を
極めし自慢も、ピクニツク氣分も、根

こそぎ覆へされ、海面つくつて歸宅すれば、脱衣を手傳ひし山の神まで棘に崇られ、いやはや散々の爲体。古人の金言宜なる哉。美しい花には棘がある。そして陽光の照りさす角度によつて、色彩を替へる山の姿に魅せられて、二度と行くまいぞへ、これ同行衆！

招く巖山

松本一満

昭和二十年陽春三月××日！

館府東方の紫色の連山に招かるゝがまゝに企てたハイク登山！ 有田光頭、松原文藝、石丸クロニツクル、伊藤謠曲氏等と、女性四人を交へた一行は十

三人。

すぐ真近に直立するかに見えるあの巖山も、行つて見ると二重山麓の上に。即ち、キャンプの地面と同じ平面の裾が第一の山麓であり緩い勾配をもつ、奥行き約三哩の砂丘は第二のそれである。

砂上半ばに空腹を覺ゆ。先づ晝食と持ち寄りの辯當に舌鼓をうちつゝ遙に我等の居城を望めば、人口六千の大館府も宇宙の偉大さの前には人體の毛穴の存在でしかない。

腹を整へて小憩後早春の冷風を身に感じつゝ、目的地點に發つ。

徑の邊の草花は満開だ。

丈餘のカクタスの一群々々、又異つた種類の小さいのもあちこちに散見するやうになつた。

まだ冬枯れの儘の姿の中に「鐵樹」

が痛々しい傷口を見せて無慙にも伐り散らされてゐる。

森羅萬象すべての事物に生の宿りを深く觀る詩人外川明君がこの様を見たならば、必ずやものゝ哀れを一入感ずるであらう。と風雅のこゝろ乏しき私さへ感傷を催すこと少時、聽て、砂と岩と接續する麓に着いたのは午後二時頃。

想つたより山は屹立して居る。だが、嶮岨を攀ぢなくて何の登山ぞ！と、カんでゐる先着の一人、ホストンが産んだ大衆作家芳川積三君に余輩も同感更に、田中、重富紅二点の共鳴者を得て勇躍山頂征服の途につけば、登るに従つて視野は開け、永却を表象するかの如き大河の流れ、コロラド河も遙の

彼方に見える。

此處は七合目あたり、これから先は女性の、しかも嫁入前の方には危険だ。蚤にも喰はせたくない體を、少しで疵つけては……と、そんな俠氣？を出したばかりに最高峰征服の榮を芳川君ひとりほしひまゝにされたは無念至極。然し、聳え立つ岩角に立つて、

一穗寒燈照眼明 沈思默座無限情

回頭知己人已遠 丈夫畢竟豈計名

世難多年萬骨枯 廟堂風色幾變更

年如流水去不返 人似草木爭春榮

邦家前路不容易 三千餘萬奈蒼生

山堂夜半夢難結 千岳萬峰風雨聲

と、維新の英傑木戸孝允の偶成作詩を朗々と吟じて居れば、精神は徐ろに山の神秘に落り入りて、邪念なく、邪氣なく、死生を超越したる聖き一刻が與へられる思ひがする。

不圖瞰下する山麓砂上の晝寢組、知るや知らずや斯かる心境を――

平素山に憧憬を有つ私は、少年時代、背丈一里の觀音ヶ峰に登つては、瀬戸の内海に点綴する嶋々、それを縫ふて航く船影にマドロスの生活を夢み、さては水平線に消え行く煙を眺めては「地球の圓なる真理」を掴んだかの喜悅に浸つたりなぞしたものであつた。

渡米後も、よく大晦日の夜、最終赤電車で、親しき友四五と、藤の名所セラマドレに行き、其處から夜を徹してマウントウナルソンに登つたものだ。

四圍静寂の深夜、俗心を洗ひ淨める谷間の水音、そゞろにせまる雄大な山氣！ 八合目と覺しき地點に立つて瞰下すれば、大羅府近郊三十二市町村の無數の燈火は一望園内にある。

その、夜の、山の神秘に打たれた印象は今尚私の腦裏に深い。

期ふした、山への追慕の念己々難く、遂に今日のハイキングとなつたのであるが、惟へば愉悅の一日ではあつた。黄昏の家路を辿る。

途中、疲れた脚を路傍に憩へば、みはるかす後方の、静かに眠るが如き巖山の精が、再訪ね来れ！ と、我が魂に呼びかけるかのやうだ。

暑くならない中に、是非もう一度訪ねたいものだ。

山上の晝寢

伊藤四郎

三月十一日十人余り連れ立つてキャン
プ東方の山を攀づ。途なき岩石の間を
上り下りつ晝の辨當を開いたのは、山
腹とはいへ未だ麓の方であつた。初め
の中は一行互に連れ合つて居たが、上
るに従つて離ればなれになつてしまつ
た。私は殿りであるから一行の様子が
よく見へる。ミセス有田は右へ左へと
足が忙がしい。活花材料蒐集に夢中の
やうである。鹿を追ふ者は山を見ず、
四人程遂に一行にはぐれて仕舞つた。私
は先進部隊に追ひつかうと急げどく
追ひつけない。顧れば眺望益々開け、

脚下の春草登るに従つて殖へ、種類も
亦多し。香氣山を包むやうな處もある。
先進部隊に詩吟初まる。松原兄は右
斜に頭を上げて吟聲を上げる。松本兄
は眞上に頭を向けて、左手に錦聲流の
本を持ち、唸り乍ら後續の事はかまひ
なしに登つて行く。私も負けぬ氣にな
つて、「歩々踏着緑水青山」と放つて見
たが、聲が出ない。有田兄の山上遙か
に右手にケーンを持ち遊歩せらるゝの
が見へる。橋本雅邦の深山遊鹿の圖を
思ひ出して一人はゝゑむ。不圖顧望す
ればコロラドの大流が白々と視界に入
つて大陸の内容が想はれる。往年雪を
踏んでオレゴンやフールド山に登り、一
万余尺の高峰を五つも六つも一望の中
に入れ、自然の偉大に接した時の事を
思ひ出したりして、我が足は一步も進

まず、どつしりと腰をおろし、水筒の水を傾け、謡曲にては相當有名な一曲を小石の上に座つて聲一杯にやうて曰く「一洞空しき谷の聲。梢に響く山彦の。無聲音を聞きたよりとなり。聲に響かぬ谷もがなと。望みしもげにかくやらん。ことに我が住む山家の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し。前には海水濼々として。月真如の光をかゝげ。後は嶺松巍々として。風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る。諫鼓苔深うして。鳥驚かずともいひつべし。謡曲の藝術に就いて疑問を抱く事三十年に近い私は未だに大家の話が判らない。此の一曲を天に向つて唸つたらう、一つ教へらるゝ處があつた。元氣を出し前進隊が休んで居る處へ着く。有田、加藤、石丸、松原の諸兄と私の

五人となる。松本、芳川両兄は紅二点を伴ひ既に山の絶頂を征伐せんとして居る。松本兄の吟聲は止まらない。松原兄は仰ぎながら「ぐあんばれ！くー！」と連發する。五人はホストンの平原を見下して、哲學書を見るやうな事を言ひ初める。一杯の水を飲んだ。實に甘露の味がした。私は此處で晝寢を提議する。加藤兄先づ西式健康法といつて大の字に石の上に踏んばる。皆思ひ思ひの方向に寝ころんでしまつた。私も夢路をたどりだしたが、半睡のまゝである。一寸頭を上げてキャンブを見たが、雀の巢のやうな感じがした。大空を見上ぐれば西から白雲は流れながら消へて行く。世界の外の世界とは大空であらうか。遐なる心を持てる者は、遐なる國をこそ慕ふとは、古今の世さへ離

れたるこの大乾坤の胸に入る事であらうか。私の胸は静かになつた。

なほやかし聲もなく飛ぶほとゝぎす。

乾坤贏得一閑人、一任清風送白雲

の両句を思ひ出す。睡りの女神の優し

い手は、うつら／＼とする私の目許を

心地よく撫でる。白雲の間より洩れ出

づる陽光と柔かき西風は、自然の岩床

の寝心地に深き眠りを誘はうとする。

私は夢心地に傍の岩石に山の心を尋ね

て見た。岩石は答へて我は唯立てるの

み。山の心はあのコロラド河に聴け。

あの懸河の辯を聞かずやと云ふ。コロ

ラドは唯茫渺とし流るゝのみなるにと

河の方に頭を返せば、目の前にデザー

トリリーと他二三の花がほゝゑんでゐ

る。私は花に尋ねる。お前は美人の髪

にさゝれたくはないのか。はた亦、い

づれ萎るゝ御前、人に摘まれて萎れたくはないのかと。しかし唯ほゝゑむばかりで何んとも答へない。答へて呉れないもどかしい思ひはいつしか深い睡りに落ちて居たのだらう。覺めてみたら松本兄の吟聲は近く迫つて居る。山上の詩吟、私は此の時初めて、詩吟は氣節を培ひ、士氣を鼓舞し、俗腸を洗ふところの感情の發露であり、魂の叫びである事を痛切に感じた。人情を動かし、風俗を移すには宜しく高邁、勇壯、風流なる詩を朗吟すべきである。



山する心

石丸九十九

山を歩く氣持は何と云つても楽しい。氣の合つた友達などゝ、三日分の食糧やテントを肩に時間や豫定など一切お構ひなしに只漫然と山を歩き廻ることぐらひ楽しいことはまあないであらう。日が暮れゝば清水の湧いてゐるさうな山蔭を見つけてテントを張る。薪を伐るもの、飯を炊くもの或ひは又味噌汁の實になりさうな薊、獨活、岳蕨などを採しに出かけるもの——あの一刻の樂しさは何にたとえやう。

先達つて日本から贈られた書籍の中に「山と溪谷」と云ふ田部重治さんの

書かれた紀行文が一冊入つてゐるのが目についた。この田部さんとは数年前の春、尾瀬沼を歩いた折りに偶々知合ひとなり、二日越岳からあの邊一帯をお伴して廻つたこともあつたので一寸懐しく、早速圖書館へ行つて鈴木さんからその本を貸して頂いた。淡々たる筆致の中に何らのスリルも美辭麗句をも變ねずして語られる山は人によつては退屈を感じさせられるかも知れない。しかしながら山への断ちがたい愛着を持つ人々にはあの淡々たる筆の中から溪流のせゝらぎを聞き、さや／＼と鳴る若葉のそよぎを身に近く感ずるに違ひない。

白樺の林につゝまれた尾瀬沼の長蔵小屋——と云つても可なり山の宿であるが——の圍爐裏端にみんなで岩魚

焼く／＼聞いた田部さんの山の話は今も猶記憶に新しい。

「私はヒマラヤのカンチエンジエンが登攀隊にも加はつたことがありますが、あんなのに比べると日本の山はまるで丘みたいなものです。アルプス山系の山にしたところで大抵どれでも一万五千呎位ひ、ヒマラヤ系などは二万五千だ三万だと云ふのですからまあ富士山の三倍はある譯です。」

五十幾歳と云ふには若々しい田部さんは血色のいい顔を楯火にそめながら語りつづけるのであつた。

「でも山は高きがゆえに尊からず、です。私は北アルプスの黒部川溪谷、南アルプスの大井川溪谷などの自然美を標るにつれて日本の山々は世界のどこにも劣らない豪快纖細なる溪谷美を

もつてゐることを知りました。低山趣味——とでも云ひますかね、私は高い山の頂きを極めるよりも山の本當の美しさを賞美しながらあちこちの山を只漫然と歩き廻るのが好きなんです。」

田部さんのこの話を聞いて以来私は断然所謂低山趣味を金科玉條として墨守することにした。

そこで先日 of 統政部主催山歩きに於て松本、芳川並に重富、田中の英雄、女傑に伍して巖山を一番征服せんものと私が意氣込まなかつたのも、偏えにこの低山趣味をホストンに於てまで徹底しやうとしたが爲であり、且つは松原、伊藤、加藤、有田の諸面々の低山趣味らしく思へた歩きぶりに大いに共鳴したが故であつたことは知る人ぞ知る。

低山趣味は至極結構である——が低山を標高の低い山と解して大した準備もせず、谷川岳に登り、ひどい目に會つたときだけは自分の早合点を棚に上げてツク／＼田部さんの低山趣味鼓吹をうらめしく思つた。

標高約五千八百呎の谷川岳はその高さから云へば内地でも三流どころの山にしか過ぎないが、それが東京に近い上に雪溪どお花畑をもつ所謂アルペンの風貌を備へた山として登山者の間には中々人氣のある山である。私はこの山に登つてみて寧ろ一万呎級の槍や穂高、立山などの方がかへつて所謂低山趣味にかなつた山である様な氣がさせられた。と云ふのはこの山が見かけによらない複雑な地形を持ち天候の激変も他に類を見ない程頻繁だつたからで

ある。

私は谷間から間断なく這ひ上つてくる白衣の如き濃霧の中に一瞬にして下山路を失ひまる。一晝夜を水だけ飲んで飢餓と戦ひ續けたあの谷川岳の山旅を今でもとき／＼悪夢のやうに思ひ出すことがある。

山は生きてゐる。低きが故に山を侮るものは必ずその嚴肅なる山の怒りを受けなければならぬことを私はこの山から鋭く教へられたことを今でも感謝してゐる。

愛すべく、敬すべきものは實に山である。山への思慕——断ち難い山への愛着の念は、恰も觸るれば鳴り止まぬ樂器の如く絶へず私達の心を山へ／＼と馳りたてずにはおかないであらう。

(統政部山行きに加はりて)

インデヤン・

ラブ・コール

有田 百

色とりどりの寶石を撒き散したやうな砂丘を、ジクザツクに進み行く十三名の一行――。

見事な色彩と紋様を持つ小石を押し除けて、頭を擡げた一寸の草にも、四五寸の草にも、尺餘の草にも、紫あり、黄あり、紅あり、白あり、爛漫として花をつけ、満眸の春光、融々として名画の中にあるを思はしめた。別けても、莖長きクリム色の、コスモスに似た花は、高潔な天女の面影である。清香を徳と薰じ、潔白の色を操と保ち、もろくの沙漠の花が、その葉に、その

(四)

枝に、世を僻みて棘持つ中に、只獨り之にも染まず、素直に、浮世を憂ひ人を悲しむ涙は、露と凝りて、憂の色を帯ぶれども、彌生の天日を仰いで、涙を含む瞳、いと氣高き微笑を湛へ、咲いて驕らず、散りて恨みず、清く世を過して永遠の春に入るは此の花ならめや。

先行く人に踏みにじられた、無惨な花の姿を見ては、噫！心無げの人ぞと、ハツと忍ふこと、幾そ度びもあつた。

杓子を継ぎ合はせたやうな奇怪な植物――而も一面の痘痕面、其の斑痕の一つ一つに数本の棘を生やし、若し之に觸ると、深く肉に喰入つて、ピリピリと人を痛ましむ。何すれぞ斯くも世を僻み、人に辛く當るぞ――。其の

上濃艶な牡丹色の花を身につけて、人を誘惑し、人を悩ます姿態の如何に毒々しさよ——。

尺又尺、上る程に下界の視野はいよいよ拓けゆく。ふと天を仰げば、天も無限大に展げられてゐる。

——大所高所より物を視る——

とは此んな境地を言ふのであらう。

紫を帯びた峨々たる岩山の麓に達した時、「西式健康法修練所に格好だ」と言つて、手際よく轉がつたのは伊藤四郎居士であつた。之にならつて四五人が仰臥したが、一面に小石を敷きつめてある修練所であるので、背骨が仲々に痛かつた。

其處の空間には物の音とてしない。全く静寂な仙境で「山静かにして太古の如し」とはこんな所であらう。など

と思ひながら目をつぶつてゐると、旅の疲れで神経がだん／＼と遠くなる。

夢と現の境にさまよつてゐた少時——

遙か天上より——丁度、春の日本の、

ちぎれ／＼の白雲の内から、美妙的な咽喉を轉がして、轉ずる雲雀に紛ふなき

——高く又低く、さながらに、銀鈴を

珠玉の盤上に轉がすやうな、妙なる麗

はしい聲で、彼の名曲「インデヤンラ

ブ・コール」の美しいメロデーの歌詞が

岩山の上から麓へ、麓から溪谷へ、曉

々として又嬈々として流れて来た。此

の豫期せぬ天樂に、今しも夢路を辿つ

てゐた一同は、深き沈黙のまゝやほら

體を起して、聲の主の方を見やつたの

であつた。それは、健氣にも岩山に攀

ぢ登つた歌姫、田中綾子嬢であつた。

嬢は大宇宙の靈感に打たれたのであら

う。それとも、其の上、此の荒寥たる沙漠に「印度人保護地」てふ美名の下に抛り込まれた幾万かのインデヤンが、しかと虚空をつかみては、解けぬ恨みを千載に残して、憤死したであらう此の地——年代こそ違へ、孃が、己が今の境遇と比べて、此處インデヤンに限りない同情を寄せたのであらう。遙か西の方に棒大にしか見へぬインデヤン・スクールの塔に向つて、心行くばかりに、朗々と音波を送つたのであつた。

「ウムー素的だなア——。此の場面は——。しばし、こんな恍惚境に逍遙してゐたが、同じ岩山より流れ出した、本戸孝允作「偶成」の悲壯な朗吟——主は松本一満——。やがて岩山を征服した満足の誇り「萬歳」の聲の主は芳川積三——。

あゝ、惜しい事に、此の得も言はれぬ光景——詩——画の世界が俄然として兩君のために俗界に還元してしまつた。

x x

君！大ポストン！何んだね——、丸で棒大にしか見へぬ喃。あの小局部で、善い、悪い、可、不可などゝ蠢動する我々——井中の蛙とは至言た喃！。宇宙の大真理に突き當つたのが、加藤義太郎翁であつた。

蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。

と白樂天は言つた。

やほら松原信雄君は腰間より小瓶を取り出し、強き芳香の一滴に咽喉を潤しては、陶然、愉快な眼をグルリと一廻轉させた。

其の夜は何時迄もく、インデヤン・ラブ・コールが鼓膜を叩く。(一九四五、三一七)

下界を離れて

重富初枝

此の邊り一帯の山々の地理に委しい石丸さんの御案内で、加藤さん、綾ちゃんに私を加へた四人は、春山の柔かいそよ風を胸に受けながら颯爽と目的の岳に姿を現はしました。

さあ此處で待望のお辨當か戴けると内心さはやかな歡聲を擧げて居る時、別動隊の一人であつた松本さんが俄然猛行動を起して、呆氣にとられて居る私達四人を尻目に掛け乍らどん／＼追ひ越して先に進まれるのです。續く勇者は芳川さんでした。

「もう此處が終点ですよ」と御注意

すれば、

「折角此處まで来てあの岩山を征服しないのは卑怯だ」と松本さんは仰有るし、

「僕は一生の憶出に断然あの山に登る」と芳川さんも負けじといきめかれろのでした。

「登る時は登れても降りる時がこわいから」とこわがりの私は一應は尻込みにして見ましたが、

「大丈夫だよこれ位の岩山は」と言ふ松本さんの大鼓判に信賴して、とうとう綾ちゃんと一緒に登り始めたのでした――。

「僕は断然登らん」と登る意志のない事を表示された石丸さんでしたが、或は登る勇氣のない事を暗示されたのではないだろうかと怪しみながら――。

踏みしめた足許の岩は脆く崩れかけ、慌てゝ掴んだ岩壁もばら／＼と碎け落ち、幾度も引つ返したくなるのを我慢してやつと目的の山頂の半分ばかりに攀ち登つた時、もう登れないと悲鳴をあげてしまひました。

「がんばれ！　がんばれ！」と聲援とも皮肉ともつかない石丸さんの蠻聲は、勇者を氣取つた四人の形勢今は非なりと見てとるや、

「どうしたんだ　登らんかア！　そこは頂上ぢやないさう」と鋭く肉迫して来るのでした。

「もう道がなくて登れん」松本さんは四人を代表して辯解に努められましたが、先程の高言の手前いさゝか苦しうでした。

口惜しいけれど仕方がない。頂上に

行くのは諦めて此處でお辨當を頂くことにしました。

下では石丸さんが怒鳴り疲れて、あの砂利を敷き詰めたやうな平坦な丘の上に加藤さんと二人で、お行儀よく並べたお箸のやうに仲よく横はつておいでになりました。

お辨當を頂き乍ら見下すポストンは紫色の山々に圍まれてボーツと霞み、定規をあてたやうな真直な線で其の外郭が描かれ、恰も夢の中の王國のやうでした。

目を開ざると自分は今人間世界を抜け出して、ゴミ／＼した下界を遙かに見下す天上界に遊んで居る氣がしました。あのマツチ箱のやうなポストンで日常の些か事に、歎いたり悲しんだり喜んだりして居たことが如何にも小さ

く感じられ、今は急に擴大した自己を見出したやうな氣持で暫し幸福でありました。

下の丘に横はつて居たお二人に、何時の間にか松原さん、伊藤さん、有田さんが加はつてお箸が五本になつて並んで居たのでした。

生花の材料集めに夢中になつて居られた有田夫人、トムさん、久子さん、花ちゃん達は植物の多い谷間に隠れてでも居るのか、此處から探した目には見當りませんでした。

食後、諦め切れないで單身遂に頂上を極められた芳川さんをお待ちして岩山を下りました。下りは谷間を傳つて下りたので、案外樂で案ずるよりは生むが遙かに易かつたのでした。

五人の落伍者へは私達のお土産とし

て、チク／＼刺す棘は持つて居るけれどあでやかな花を咲かせてゐるシヤボテンに添へて、美しい綾ちゃんの獨唱を捧げたのでした。

九人で最後のお辨當を頂いた後、お土産のシヤボテンに惱まされながら又人の住む下界を指して降り始めたのでした。

山は呼ぶ

松原信雄

「やあ、よく来たね。同行十三人だね。吾輩は山と申す。人間世界の一隅播鉢の中で『是ぢや、否ぢや』と泡を吹いてゐた君等が、宇宙の運命を達觀

し、雨降らば降れ、風吹かば吹り、泰然自若巍然として天を擎し、黙々として低地を睥睨して居る吾輩に、教へを乞はうと發心した文でも可愛いよ。

さて、腹が空いたから、まあ吾輩の膝の上に座つて、ゆつくり辨當を食べるがよいぞ。うん、どうぢや、握り飯に香々が一等旨いだらう。澄み切つた空氣、心を煩はず何物もない静かな廣々とした周圍、君達は心の垢を洗ひ落したやうな爽かな氣持になつただらう。それ丈で心身に巢喰うてゐた諸種の病菌は逃げ失せて益々健康になるぞ。下の方を見給へ、あの拳ほどの一点が君等のキャンプ・ワンだ。あの狭い處で君等は井底の蛙宜しく、豪さうな熱を上げてゐるんだ。右端に見えるのは水タンクだが、キャンプでは仰ぎ

見るタンクも、此處から見ればどうぢや、地に喰つ付いて哀れなものだ。

さあ、腹が出来たらぼつ／＼一緒に少し歩かう。なに有田夫人は久子と花子を連れて生花の材料とりぢやと？、御婦人は感心ぢや。人の心に潜んでゐる美的感覺を喚び覺すのは婦人の天職ぢやからのう。その谷間へ下りたらいいがあるだらう。タムは若役に辨當擔いで御婦人達の御伴をするがよいぞ。ぢや氣を附けて行けよ。

「あの赤い花は仙人掌だ。美貌に迷はされてうっかり側へ寄ると、一撃の下に突き刺されるぞ。美貌を見せびらかして、他の男を惱殺する人妻のやうに罪の深い花だから用心しろよ。それより足下に咲いてる赤青黄、色とりど

フルドゥラ

りの草花が可愛いちやないか。「散らないうちに、私を手折つて貴方の胸にさして、どうか愛して下さい。」さう言ひたげな表情は何としほらしいではないか。穢れなき青春の美を守りつゝ静かに愛人の訪れを待つてゐる純な田舎娘のやうに神々しいではないか。愛されたいのだ！花も乙女も生あるものは凡て愛されたいのだ。孤獨は淋しい。愛し愛され、相寄り相扶けつゝ生きたいのだ。肉親の愛、男女の愛、民族の愛、人類の愛、愛あるところ如何なる苦難も解消する。人間は憎むため、争ふために生れたのではない。愛し愛されるために與へられた生命だぞ。人間よ、愛に目覺めよ！さて、説教は又後でゆつくり聞かさう。もう少し上に登るがよからう。」

「は、あ、松本、芳川、初枝、綾子、の四人は仲々勇敢ぢやない。とろく、あの岳を攀じ登つて詩吟をやつてござる。加藤と石丸は『そんな蠻勇は發揮しないぞ！』とばかり、その下で花を楽しんでゐるらしい。松原の奴は獨り詩吟の眞似を怒鳴り乍ら、判りもしないのに石を搜してゐるわい。そりや、スコイルは松原の蠻聲に喫驚して木の上に駆け登つたわい。遙か後方を伊藤は哲學し乍ら登つて行き居る。更にその後を有田が杖を引摺つて行くが、太陽と光を争ふなんて大それた考へを起したものだから、躓いて足を痛めたんだらう。」

處で羽根は可哀想に、人間に進化する前の猿より又遙か以前の四足獸時代を慕ふて、カヨテの哀れな吠聲を眞似

するために、人間共から氣違ひ極みに
されてゐたが、同僚からも相手にされ
ず、さりとてカヨヲを啼き負かす自信
もないし、彼女としんねこで一杯やる
度胸もないものだから、唯一人あのマ
ツ子箱の隅で肥つた身體を持て余して
居るんだらう。不憫な男だ。

………

「姿が見えぬと思つてゐたら、こん
な石の上に大の字になつて、山上の生
氣を吸収してゐたのか、結構ぢや、そ
れで三年は確かに壽命が延びるぞ。

そりや、蠻勇四人組は愉快さうに唱
ひながら下りて来たから、一緒に残り
の辨當を平らげて、暗くならないうち
に、ぼつ／＼歸るがよからう。ぢや、
又来いよ。

(暈)

留守番記

羽根政春

恰度其の日の午後の謠曲の稽古とか
ち合ふので、折角統政部の山行計畫の
通告を受けたが私はそれを断らなけれ
ばならなかつた。

謠曲すら理解出来ない非文化人の多
い統政部及び其の常連達に其れを理由
に山行に加はらないと申し出たら事が
面倒になると承知して居ながら、常に
頭に神様のお宿りになつて居る私には
さうする外方法がなかつた。

果して野蠻人共がわめき出したので
あつた。それは何も私のやうな肥つち
よを連れて登山をしたかつた譯ではな

いが、平素から謡曲と私との友愛關係への嫉妬が爆發したのであった。此の人達の悪口雑言は脱線して遂に謡曲の神聖をすら冒さんとするに到った。非文明人の論議といふものは何時でもかうなりたがるものである。

私は心の中でお祈りを初めた。「神よこの憐むべき人達に理智を與へて少くとも謡曲位は理解せしめて下さるやうに、又其れが出来なければせめて其の日雨でも降らせて居残る私への彼等の悪口雑言を封じて下さるやうに。」

私の至誠は四分の一程天に通じた。謡曲を理解する理智は此の人達に授けられなかつたが、天候の方では雨にはならなかつたが其の日はどんより曇つて来た。とう／＼私は自己承諾でお留守居をすることにした。

からんとして冷冷した事務所に入つて来てデスクの前に坐つた時淋しいなあと思つた。

一番奥の卓を見た。今日は謹嚴な加藤總理のイガグリ頭が見つからなかつた。其の次の卓を見た。卓に乗りかかると、其の次にして小忙しく筆を運ぶ松原さんの大きなオデコが其處になかつた。温室に育つた菊の花のやうな初枝嬢の「文藝」の原稿の推敲に困つて居る姿もなかつた。谷間の百合の花のやうな綾子嬢がオゴソかな姿態でタイプライターを叩いて居るのも見つからなかつた。満開の牡丹のやうな久子嬢が場所ちがひの漢語で馴れた事を言つては身を反らして爆笑する姿も其處になかつた。最後に参事會書記長有田閣下の光輝燦然たるお頭の無いのに氣が付いて、

急に此處の暗いのを感じて来た。

私は電燈の紐を引つ張つて見た。

ぱつと電燈がついた。同時にぱつと

私の胸に閃いた感情があつた。「文明人

の悲哀」とでも言ふものであらうか。

私は獨言した。

「人間は時々『謡曲すら解らない』

非文明人になつて登山でもする方がい

いんぢやないかな。」

△

△

都々逸

谷本晚香

月は優しく寢窓にさす

長い戦争の面にくさ。

風のまに／＼靡いちや居れど

心動かぬ糸柳。

闇路^{やみぢみとせ}三年も辛抱で過ぎて

聴て出ませう丸い月。

COMPLIMENTS

OF

NATIONAL GROCERY CO

MESA, ARIZ.

WHOLESALE - QUALITY GROCERS

詩
 外川明
 短歌
 永瀬勇
 俳句
 外川明
 川柳
 島原潮風



療養院にて

平

八

私の淋しさが
人の淋しさを
たずねて行く

私の淋しさが
人の淋しさが
なぐさめやうとする

私の淋しさが
娘の可愛らしい淋しさに
あたためられてゐる

一つ一つの淋しさが
一つ一つのベッドに
きちんとねてゐる病院

若い男の目が
死の淋しさを
空間に凍結する

老人の笑ひが
生の淋しさを
震はせてゐる

長い廊下には
古い淋しさが
巢喰つてゐるのだ

月光の山腹に淋しさが
毛布の様な霧となつて
夜ごと白くたゞよつてゐる

今夜も淋しさは猫の聲となつて
木蔭と縁の下と
私の心を搔く

生活断章

片井溪巖子

雪から拾うた赤いリンゴを

ころ／＼啄むロビンの身振りを

ユタ開拓碑の影からみてる

二月二十七日の三時四十七分。

×

たべあひたロビンが

かはゆくみねむりする

さまのほほゑましく。

いしのだん／＼をのぼり

くるをんなのこゑに、

とびたつ松の木の間。

×

たづねて日本櫓の

まだかたいにがい蕾をかむ、
下崩えのキヤピタルヒル。

×

ライラツクの太い芽に

きのうもけふも雫する、

閑散なソートレーキは

うらのロツキー山から、

大雲小雲春の雪。

×

都會の片隅へもどる

まったく吹雪の中。

×

雪夜の美しい枝を

克明に描きたる

とりすましたお月さん。

×

これまでしか書けない
ここだけは通ふじたい。

にんげんのさもしさも、
結局はタイムの問題。

x
淡雪つもる

バスをまつまぬるる

x
ここは春おそい

x
麓までの桃畑。

x
鈴懸の身は

こづえに冬からの眠り。

x
どの煙突も吐く

意勢のよい煙り、

うれしいふところ手。

x
バアを覗き廻る異國情緒。

(オクデンに来て、彌生、二五)

三 死

平田水村

中村郁子氏が逝去された事を知り同氏から一九二六年秋贈られた歌集「風信子」を發刊された頃に作つた此の拙い旧作一篇を故人の靈に捧ぐ。

わたしはこの頃

死について考へることがある。

自分は現在斯ふして

生きて居るが何時かは

自分が愛して居る者

自分を愛して呉れて居る者

其の人達を残して

死んでゆくのだ。

如何に恐れても

如何に悲しんでも

自分はいつかは

死ななくてはならぬのだ

否自分はかりではない

生きとし生ける者皆

一度は死ななくてはならぬのだ。

誰かが云った

「心臓の鼓動の一つ一つは

人間が生れてから

墓場に行くまで

絶へず打ち鳴らして居る

鐘の音と同じだ」と

實際その通りだ。

こんなことを考へて居る間も

自分達は死に近づいて居るのだ

それに悲しいことは

自分が死んだら

あんなに愛して居て呉れる人達も

またあんなに愛して居る人達も

直ぐ自分のことなどは

忘れてしまふに違ひない

たとへ自分を憶ひ出して呉れ

自分のために泣いて呉れる

人達があつても

それは僅かの間のことだ

いつしか忘れてしまふのだ。

その恐しい死は刻々と

自分に近づいて居るのだ

戀人と睦まじく語る間も

女を自分の腕に抱いて

甘い歡樂に酔つて居る間も

死は遠慮なく近寄りつゝあるのだ――

あゝ實際どうしたらよいのだ。

流 轉

再 隔 離 さ し れ 人 々
牧 さ ゆ り

いづこにも別離の哀愁はつきまとい
宿命によつて作られる移民史は哀しい。

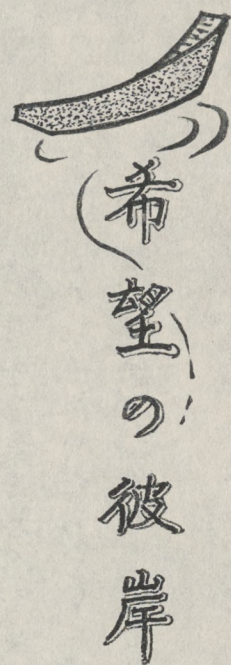
弱い光に反射して水晶のやうに美しかった泪……
去つてしまつた多勢の人を思ふ時は淋しい。

父を失つた者もある 息子を失つた者もある
若くして夫に別れた人 戀人に別れた人もあるだらう。

幾十時間となく旅を行く車に凭れて
第一の故郷を 第二の故郷を 想つてゐるだらう
湖底にゆれる假家の灯をなつかしみつゝ……

父を息子を夫を戀人を失つた人々よ！
思ひ切り泣いたらいひ 悲しみをさけないで
私は 決して女々しいとは云ひません。

新しく綴られる移民史には血の涙が滲んでゐる。



木内春波

青草にまろびて

顔には強すぎる日光を夢縹帽子に受けて

ひとり、静かにもの思ふ……

大地の廻る音が、もの皆の生の勝どき？

春のかほりに乗つて吾が耳朶を打つ

煙草のけむりさえ伸びゆく力を見せて

空へ——、青空へと眞直に昇つて消える。

捨てられ、踏みにぢられた野原の草々も

青々と……活々と、生きる喜びの合唱！

麗かなる南國の彌生の眞晝。

x

其の持てる總てを喪失した現今の吾
然れども……

血と肉と脈打てる心臓とは

誰にも搾取されない吾財寶

眠れる柵ぬちの生活よ

沙漠の三年よ、さようなら！

血と肉の小舟に脈打つ心臓を帆立て

いざ漕ぎ出さむ自由の海へ……

世の荒波は、よし高くとも

運命の許す天候に小舟を任せて

希望を捨てず目指す彼岸へ……

四時半

マツイ・シユウスイ

苦しみの工廠の

敵愾心のビラは あちこちと

あゝ異色人なるたつた一人のこの身は

是を認め得ること出来ず

非に陥れつゝ

四時半は迫つて来る。

四時半

歸家を知らぬ従兄

出来上る齒車の型に涙はにじむ

曾て同胞愛を唱へた報酬か

従兄はまたも凍雪の道を

左様ならと告げて

審問局に出かける

その姿の哀れさ

何が爲めに

彼と我は己が身を犠牲に

絶えざる不安に

この四時半と云ふ運命を受けるのか

三年の病める靈に

日夜坐禪の灯を求めんとて

ほのかに泣くや

可憐なはらからの殺戮戦

おゝ神さまよ……………と

祈りに泣ぐむ

祈禱會の二人

僕は悄然と

あの四時半を見つめた。

昭和二十年二月十二日四時半

註

祈禱會の二人は僕の敬虔なる日本畫壇の印象派の重鎮今村、幸人御両所である。

自由律
俳句

彌生日記

木内春波



からり晴れてピツニヤ眼に惨むむらさき
今日を流離のマスキツド林は芽ぶく
煙草のけむり煙の中に夜更けて風吹く
降りみ降らずみプロペラの爆音消えゆく黒雲
静けさは墨繪の山々まろい春の月
春陽うらゝか耕やせは黒鳥の集りて
むざ／＼戦死の愛児よ軍服姿へ供へる
雨音小止みなく屋根裏の板のふしぶし
桃の花は造花のひな祭初子の母よ
若草に寝そべつて思ふ事なし口笛
最後まで居ります、もう一足の下駄
何處へ行ってから蒔くやら兔に再大根の種子も

俳句
春季生花習作
展覧會を觀る

吉里竜耳

長閑や活花を觀る人の列
さ緑は天に伸びたり芽ばり桑
大幹を大地に伏せて梨の花
花林檎眞上に灯る百燭燈
セージ枝の枯淡を補い木瓜の花
花杏松と竹とをあしらわれ
杏の花名札を見れば知人なり
水盤の空所明るし楓の芽
輝きて灯を返す壺や猫柳
矯められし親と並びて葺の角
カクタスをルビンと活けて華やげり
あやめの芽堅き蕾の倒れがち

俳句
春寒

トハズ
島本巽村

一齊に白きキヤツプやメスの春
春寒く塞ぎたる爐のまた恋し

□ ニューヨークへ轉住の友へ

心せよ東部は餘寒これからぞ
種子蒔くやいづれ轉住の庭なれど
春寒や爐火を起して乾す襦袢

□ 若狭事件三週忌

行春や見張塔にもある哀史
春愁や子は勇ましく征きつれど
造花もて葺きし御屋根甘茶佛
灌佛や造花に埋れ給ふなる

彌生歌會詠草集

(順序不同)

コロラド 内堀 三太郎

千町の麥の穂波をながめつゝ今年かぎりの名残りとし思ふ。

日につれて赤く化しゆく世界の姿を新聞の上に今日も吾が讀む。

心なき共產主義の轉住所に育ちゆく子等の来し思ほゆ。

血腥き硫黄ヶ嶋の荒磯を吹きしづめ給へ天津しなつひこ。

デンバー 安井 静女

翁ひとり庭に柴かけり窓ぬちに子の應召の旗かゝげたる。

春休みは家郷で待つと娘に言ひしこともなほ空し排斥のつよく。

長病みの友を見舞はんと思ひつつもはたし得ざりしが今日悔いらる。(告別式にて)

赤星 さと

雨霰こもこも一日ふりにつつ夕べはつひに吹雪としなりぬ。

すさまじく音たてにつつ吹く風に雪はみだれて渦巻きけぶる。
我が愛ずるカーネーションのコサージュは銀のりボンに引立ちて見ゆ。

シカゴ 矢形 溪山

街路樹の南の枝は日をぬくみすでに胎める青芽を感じず。

うららかに朝陽照り添ふ屋根の上を翹音さやけく白鳩とべり。

晴れ曇り定かならねば昨日今日猶生と云ふに心和まず。

枯庭に寒く時雨るるあめ見つつマンザナよりの花硬り讀む。

加州 廣戸 静香

いざ友よ今は別れて吾が行かむ春雨けぶるキャンプを後に。

雨の中を見送り給ひし友垣の面輪おもてしぬばれて去りがたくをり。(パーカー驛にて)

草も木も花と雪着ける山行けば旅につかれし目に清しもよ。

かこはれのキャンプを出で、歸りたる吾家は桃の花ざかりなり。

貴家 志ま子

やまとなる民とし生れてアメリカに身は老いにつつ此の非常時を。

閉鎖の日近づきにつつ出すべきにあてどなき人数多なるべし。

業終へて歸る夜道に月更けつ續く廣野に音ひとつなし。

中空の陽を圍むがに虹の四つ暫し重りうすれ行きたり。

川原 八重子

農園関係者のピクニック、

待ちかねし今朝をきほひて家族らが自動車まつ間の楽しきざわめき。
黒ずめる古木の枝中浅黄なし若芽もえ居りて明るき林。
木下かげ涼しき丘にむしろして監視の人共にあそびぬ。
湖の水かとの問ふほどに川の流れば静かにたゆたふ。

北林 静江

活花展覧會を迎へて。

この谷へすでに來たりし友かある切り捨てられて木枝散らばれり。(素材取りに)
吾が病めば素材に不自由すらむと言ひ友は賜ひぬ岩石松を。
松は眞に根メにあふひあしらへば花の赤きがきはだちて見ゆ。
活け並し草木の花は盛りにて崖百合も甘き香をはなちをり。

鈴木 緑松

春さりてコロラド河を溢れゆく雪解の水はうちたぎちつつ。
雨晴れてあかるき庭のにはたづみ若葉の樹々の倒さまに映る。

聞き馴れぬ聲に出で見れば七羽の鶴輪をなし舞へり空の中處なかどを。
鳴きつれて七羽の鶴は春空に輪を描きつつ高まりゆくも。

児玉なを

見欲しさに人に交りて来し河か大きうねりを今ぞ現うつつに。

岩ばしる雪解り水も湛へけむゆたかに廣しコロラド河は。

昨年きぞの夏人の失せにし魔の淵と指すにかしこぞ渦波きどなみしるき。

一日ひとひ河に遊び暮せし日の夕べ面の熱ほてりをおのれさびしむ。

大園晴子

肇國聖蹟歌を讀みて故郷を偲ぶ。

聖蹟歌見れば思ほゆ故郷ふるさとの名もなき城の跡の我が家を。

有明の海を眼下に見渡せる大園山の城主は誰ぞ。

裏庭の梅の古木の下地したちに水仙の花今も咲くらむか。

名もなさずここだほろびしつはものの塚に哀かなしく桐一とつ立つ。

木下落葉

パロール得て今宵戻りし父われを取巻く子等の恙かたなき顔。

みとせぶりに旅中戻りし父われにたはむれより来愛かこしやも子等は。

いささかは部屋らしくなる喜びもありてバラツクに壁紙張るも。
 激戦のラヂオ聴きぬつつ眼に顯は二世兵吾子の実貫の姿。

永瀬正臣

寒林に淡き煙のたゆたふは木炭焼くかまゆ出でし煙か。
 くにぐにが興亡かけて戦へる時のわが身に後悔なあらせそ。
 庭の邊の草木は既に萌え出でぬ三日四日ぬくき陽のかゞよひて。
 眼鏡かけて母が讀ますは兵の弟がやうやくならひて書きし假名ぶみ。

望月みどり

埒もなきことにこたはりぬし吾れのおかしくなりぬ春の陽の下。
 病院の庭芝を刈る人ありて青草の匂ひしるく香に立つ。
 御愁はあはれ暮り来ほのあまき青草の香をかぎてゐたれば。
 春くれば名もなき花も己がじしちからの限り咲くがあはれさ。

赤松傳代

一と言をいはむとすれど胸せまり聲には出でず只涙のみ。
 庭木々にうちどよもして吹く風は埃上げつつひもすがらなり。
 入營の日は迫りつつ宗教の本讀みて子はつつましく居り。

川口 静洋

咲く花を待たで散華ゆく丈夫に今日の花屐を手向けとやせむ。
現世の汚れ見ぬげに岩山の峽に匂ふ白百合の花。

猿渡 則子

わが家族みなすこやかにあり経しは神のめぐみと思ひつつしむ。
この空や遠く祖國に老い給ふ母も今宵は仰ぎ見まさむか。
夕日は輝きそめつ天の原ひろきに浮ぶ雲一つなし。

升谷 千代

風情なき山と思ひし岩山に心寄りゆくこの夕べかも。
祖國と身を寄す國の激戦は聲をひそめて思ひみるべし。
正常なる生活にかへる嬉しさか歸還の友の面晴れて見ゆ。

永瀬 勇

よはひはづか二十八にして右大臣實朝は歌にも秀いでゐたまひき。(金槐集を讀みて)
傘もたず友を去なしめてあなもとな曇りは屋根に音たてて来ぬ。(K氏に)
よき友の歸りつくまでの道の間はいたくなふりそこの餓かあり。
冬木なす榆の細かき枝毎に水玉つらぬきて雨あがりたり。

後記

三月は殆んど風に暮れて仕舞つたと言つてよい程毎日よく吹いた。明日はもう四月だ。西洋の諺に、三月は獅子ライオンの様に入つて羊ラムの様に出て行く。と言はれてあるが全くその通りで、昨日迄荒れ狂つてゐた風も今日はすっかり風ぎはてゝ、誠に穩かに日向を歩くと肌えの汗ばむのを感じず程の暖かさであつた。水泳場の側を通つて驚いた事は、もう河童の子等が盛んに泳いでゐた事である。斯様に春も眞只中の今日吾々は三月歌會を例の處で催うした。先に牟田靜子氏を加州へ送り、其れから内堀氏をコロラドへ、其して先日は大空君を市俄古へと言ふ風に、此の歌會も最近一度に三名の歌友を送り出して大変心淋しくなつた。今後は益益減つてゆくのではないかと思ふが、これも致し方ない事である。尚其の上病氣や他の差支へで見えなかつた人々が五六名もあり、出席した友は僅かに十一名に過ぎず寂しい歌會であつた。併し其の反對に今回新たに木下落葉氏の入會を見たことは大いに嬉しかった。周知の如く氏は斯道には既に二十年からの經驗を持たれる人であり、名實共に吾々の先輩である。今日まで良い指導者を持たなかつた吾々歌會は此處に始めて力量ある指導者を得た譯で、今後は大いに氏に期待するところあり、又啓發されてゆく事を信じて疑はない者である。歌友の諸君も實際短歌に執着を持つたならば、此の機會を逃さず次回からは努めて出席されたいものである。尚恙にて病床にあられる方々にも一日も早く其の病魔を打ちのめして、次回歌會までには必ず出席なされるまでに元氣を回復されむことを祈念して止まな

い次第である。尚ホストーンは春になつたかと思ふとすぐ夏の暑さがやつて来るのであるから、健康であられる方々も充分に注意されて身體を大切にし、そして斯道に精進努力あらむことを望む。

三、三一、夜半記ス。

窪田空穂先生の短歌 数首

夕焼の雲の中より人出でぬ登らむとして見あぐる長坂。
夕空の裾に群らがる茜雲色やはらぎて春ならむとす。

枯れ松葉敷きたる庭の飛石の續きて盡きぬ水寒き池に。

わが父のちんどん屋にておはしなば悲しからむとちんどん屋見つ。

廣き世に狭き心を持ちて生き生きの嘆きをしにけり我は。

厭ふべき身よと泣く日も曾てわれ人を羨む心はなかりき。

富みたりと賢しと聞く人にして眞心持つは稀なりけり。

堀越しに竿のび出でて我が庭の柿にとどけりほしとやこの柿。

股竿のちぎれる柿はあなあはれ落ちて此方なり堀の外そとの童。

餘所の子の盗みそこねし落し柿手に拾ひては持て餘しるる。

前回は先生の長歌を紹介した。今回は師の短歌を紹介させて頂く。特色ある此の

詠法に注意ありたい。窪田空穂先生は故國の歌壇に於ても大御所の一人である。

選 後 隨 錄

かこはれのキャンブを出でて歸りたる吾家は桃の花ざかりなり。

三年も園はれてゐた轉住所を出て、再び元の住み馴れた加州の吾家へ歸り着いた時の作者の感慨は何んなであつたらう。嚙喜びのあまり涙を流されたであらう事は想像に難く無い。眼に見るもの皆懐しい思出をもつものばかり、其の中に特に作者の眼を惹いたのがこの桃の木である。而も丁度今が花盛りで、宛ら自分達の歸還を喜び迎へて呉れる様である。斯う云つた作者の喜びの心が言外に讀者の胸にひびく誠に結構な作だと思ふ。

名もなさずここだほろびしつはものの塚に哀しく桐きり一とつ立つ。

詞書に肇國聖蹟歌を讀みて故郷を偲ぶとあるもので、此の聖蹟歌歌集は川田順氏の著になり氏が南薩の聖蹟を巡拜された時の作である。たまたまこの歌の作者は聖蹟歌に詠まれてゐる處と故郷を同じうし、其處に深い郷愁をおぼえた事と思ふ。この作の内容は彼の明治十年の役、大西郷を戴いて戦つた白虎隊の塚のある所を思ひ浮べて詠まれてゐるのである。一首全体に何んとも言はれぬ哀調が籠つてをり、殊に現在の境遇にある吾々の胸にはひしひしと滲みるものがある様に思へる力のある作だと拜見した。

満座那吟社句抄

「桃の花」「春の宵」

安田北湖

糸啞へ翔ちし雀や桃の庭

荷送りて虚ろの部屋や春の宵

山田耕人

今開きし舞踊の幕や春の宵

水桶に浸してありぬ桃の花

木内白嶺

飾られし婚禮寫真桃の花

桃咲くやセウをそびらに慰靈塔

山田天民

桃咲くや白紙覆へる畑のもの

琴の音のもるる小窓や桃の花

山崎瑠璃女

羅府を訪ふ娘の荷造りや春の宵

征く吾子に守袋や春の宵

村上聖山

啼き止みて小犬寝むたり春の宵

古びたる土人の小屋や桃の花

上村若舟

子も出でて庭草刈るや春の夕

出所する支度話や春の宵

土屋天眠

風誘ふ琵琶の遠音や春の宵

花桃に今日初七日の法會かな

望月奇風

肩の子の掴へたりし桃の花

北湖子を送る句會や春の宵

小坂静女

春宵やいさかひ好む藝人等

嬰児に頬ずりもして春の宵

永井翠敏

孤児を守る人美しや桃の花

孤児院の真晝静かや桃の花

ポストン小柳

初歩

添削講座

島原潮風

課題「髭」△原句○添削句

堀田瓢池

△武者髭がニコ／＼来れば舊馴染。

ニコ／＼来れば舊馴染。では意味を成さんから、

○武者髭がニコ／＼で来る馴染茶屋。

とても作句した方がよい。然し之でも意味はあまりない。

△やさしげな友の目圍む鐘鬼髭。

今度は鐘鬼髭で来ましたね！「友の目圍む」は可笑しいから、

○やさしげな友を睨んで鐘鬼髭。

△初対面チヨツピリ髭にいたしましたれ。

「チヨツピリ髭にいたしましたれ」は少しの髭と云ふ事であらうが、一層「チヤプリン髭」としたるより判る。

○初対面チヤプリン髭がいたしましたれ。

鈴木緑松

△歸還兵苦闘を語る無性髭。

充分意味が判るから添削の必要なし。

△決死隊無性髭から眼の配り。

「無性髭から目の配り」は不精髭で眼の配りが違ふとても云ふ意でせうから、

○眼配りが違ふ決死の不精髭。

△苦闘した日から記念の無性髭。

君のは不精髭の題ですな！此句で意味は充分判りますが、

○苦闘した日から記念に髭を立て。

或は（髭残し）と詠んだ方がやさしいと思ふ。

竹本芳公

△無精髭のばして今日も仕事に出。

あなたも無精髭ですわ！「のびして」
は不必要ですから。

○不精髭今日もそのまゝ朝を出す。
とても詠むと仕事に出るか、又は用
事があつて出る事になる。

△頬擦れば髭が痛いといひ泣き。

○頬擦れば子供いやがる不精髭。

安井静女

△不精髭土人思ふたとも云へず。

○不精髭土人の様なとも云へず。

△かけられた聲にあきれて見入る髭。

呆れて見入る程の髭でもあるまいから、

○聲の主少し見ぬ間に髭を立て。

位にして置く方がよい。(三年目の笛は種)

谷本晚香

△ヒトラーを真似た髭へも威が薄い。

○ヒトラー真似た髭でも威が薄い。

△髭の在る方は何んだか四角ばり。

まつたくです。然しさうこちうが見
るのでせう。だから、

○八字髭何んだか四角ばつて見え。
(折て来るは預り)

関五松

△疎うでも矢張り髭と云ふ構へ。

熱心だけあつて、詠むことも旨いで
す。添削不要。

△付け髭は皆稔お上げるものとされ。

どうですかね！。添削不要。

△昇格の辞令に髭が欲しくなり。

さうです。添削不要。

「髭」と「髭」の残りは来月に廻します。

左記の玉吟を寄せられ事を感謝します。

竹原白雀

座はくづれ髭も二次會舞ふ扇。

管公と綽名で解る髭の主。

嚴めしい髭が館府で皿洗ひ。

なめづつて髭の手入れを春の横。
髭だけは成程威嚴十九弗。

齒は抜けて髭の奥からものを云ひ。

第六回 柳句會

課題「外交」

島原潮風選

天位

関五松

國運を賭けた霞ヶ関の聲。

評「霞ヶ関」で（外交）を表現した

のは流石に老練。

地位

砲煙の陰に巨頭は掌を握り。星野光葉
イーデンの口もソ聯に齒が立たず。稲垣牧東

評 前者はクレミヤ會談の時局吟で

はあるが、語呂がよいから地位に

頂く。後者のも時局吟であるが、

スターリンの勢ひを詠んだもの之

も語呂が大変よい。

人位

外交の所へも故國の底力。津村汀村

外交も結局祖國の民が楯。藤井孫六

實力の後を外交理由づけ。河島次彦

五客

指金が利いて牡丹餅久し振り。速水白舟

連れだつた夫を覗かず飾り窓。難波桂馬

そうさない笑顔へ又も買はされる。稲垣秋月

奥の手は強壓手段反かせ。小町谷奉君

口上手つひ根を下し小半月。稲垣牧東

十秀

外交も上手に妻の世帯なれ。龍川巴水

實力を持つ外交は押しが利き。難波桂馬

未七人自活の道へ派手づくり。稲垣秋月

保険屋の外交議論に負けてやり。堀田瓢池

百性に保険外交勝を占め。河島次彦

外交は妻に任せて鉢いぢり。吉里竜耳

外交も時には交せて夫婦仲。稲垣牧東
愚鈍げに見せて煽て、従はせ。安井静女
欲しいものあつて娘のよく動き。同
訪問をそらさぬ妻の社交振。北村子守

佳

外交も是迄と云ふ重い靴。早川美貴子

外交は夫に任せ地味な日々。同

国力と外交の腕均衡し。橋本白砂

外交の旨さ棄つてゐる弱い國。沖本かもり

代表の手腕に頼り前後策。星野光葉

外交の機微へ素人只無口。瀧川巴水

外交の下手は世間を狭く住み。森岡春山

外交の上手ちよいく嘘も交せ。同

外交へ女房の智慧も足して見る。谷本晚香

外交も必要がない世貢ひ飯。同

策のない外交誠意で認められ。吉里竜耳

スターリン腕と外交彌次られる。北村子守

外交の所えが呼んでゐる世の人氣。同

外交の秘話も出て来る雨の音。速水白舟
外交の秘密が躍る長期戦。星野光葉
御馳走も又外交の一手段。山内狂月
腕節も又外交に物を言ひ。同
外交の極意虚實の使ひ分け。関 五松
鮮かな外交振りの男前。吉村芳乃

軸

外交の壓がきかない弱い國。

(以上八十六句中 四十句採点)

「外交」クレミヤ會談五秀

外交の秘密集めて三巨頭。吉村芳乃

三人寄り吼々歐亞に響かすか。小町谷奉君

三巨頭秘策に暮れる遊園地。速水白舟

三國の外交秘める黒い海。藤井孫六

クレミヤはスターリンが一人しり。北村子守

x

x

第六回川柳句會

課題「春めく」 田代藤枝選

三 才

矢形溪山

⑤花便りシカゴの早春へせきたせ。

評 花便りは、雪深いキャンプからでなく、シカゴから早く轉住して来る様進めて居る。流石老練の句。

新屋軟葉

⑥十八九春着嬉しい旅艱。

評 現在は十八九と云へば、男の子は居ないから女子のこととして見れば、彼女達は旅艱提げて出所するにイースターの春着は嬉しいので、「春めく心」である。

稻垣牧東

⑦良縁へ一家春めく針忙し。

客

柵内も漫春めく球の音。

瀧川巴水

口紅の裾を早春の風なぶり。

関 五松

小庭先妻は種蒔く朗かき。

小町谷奉君

フアローへ心春めく兵の妻。

稻垣秋月

春めけどキャンプ思案に灯は暗し。

関 五松

病み上り春めく空へ深呼吸。

吉村芳乃

生命の芽吹いて野山は春の色。

関 五松

前 抜

爽快な春を惱ます閉鎖令。

津村汀村

春らしく庭の手入へ来る雀。

山西里江

春らしい柄の並んだ飾窓。

同

春めいた野に一日を柵の外。

星野光葉

電線も春めいてゐる鳥の聲。

森岡春山

春めいて氣の向くまゝに洗い髪。

吉村芳乃

黄昏の風も春めく暖かき。

安元時子

蝶を追ふ娘等も春めく花畑。

鈴木緑松

雪解けて春めく空に初燕。

同

春めきて一枚減らす借毛布。 谷本晚香

病みより春めく庭に日向ぼこ。長石孤雁
春めいて一枚脱いだ粉煙草。速水白舟
一枚を脱いでほく笑む木の芽立て。矢形溪山
桃の花咲いて沙漠の陽は麗ら。山内狂月
あかぎ摘む娘にそよくと春の風。同

自 句

ふくらみはもう生け頃の横柳。

(以上五十二句 採点二十五句)

彼の女のお便りに、「春めく」と「春」と
は多少の差がある事を色々教へられまし
た。同じキャンプの句でも御地とミホドカと
では、温度もくんと違いますから従つて詠
む句も違います。此方はまだ雪です。大雪は
春には珍しい銀世界です。けれども解け
るのも早いですがまだ寒い事。潮風

(選着)「春めく」

針の手をまぎらす外の春の色。沖本かもめ

春日和一家朗らにピクニック。同

戦乱は止まず四度目の春迎へ。同

第六十二回川柳句會

課題「迂濶」(順彦木同) 市川土偶選

佳 調

迂濶にはならぬ歸還へ銃弾が飛び。津村汀村
轉住はよく考へてからにする。同

民族の試練迂濶に居れぬ秋。星野光葉

迂濶には出られぬ今日の空模様。同

迂濶には去へぬお上の腹の底。森岡春山

迂濶には歸還出来ない彈丸の音。吉村芳乃

子澤山ぼんやり出来ぬ閉鎖令。新屋軟葉

保証人迂濶り書いた借用証。安元時子

迂濶には其の手に乗らぬ過去を持。鈴木緑松

迂濶には過してならぬ世の動き。長石孤雁

迂濶には行けぬ加州の記事を見る。関 五松

答案の迂濶から身の置き處。同

六 秀

遠乗りはうつかり出来ぬギヤスの量。山西里江
又してもキャンプのデマにつり込まれ。新屋軟葉

環境にぼんやり出来ぬ子の饗。谷本晚香
 本人と知らず談つた友の顔。山内狂月
 道連れと話がはづみ通越し。稲垣牧東
 英文に迂闊に署名して破滅。瀧川巴水

人

山内狂月

口どめを酒の氣嫌でつひ洩し。

評「語るなど人に語れば又語る語る語りて語

る世の中」と言ふ歌がある。之が人間の通有性
 であり、欠点でもある。殊に酒となると。

地

山内狂月

會合の時間忘れた暮の立見

評 屢々見受ける光景で、私などは常にかうした
 体験を持つてゐる。着想は必ずしも新しいとはい
 言へないが、題を巧に消化して居る所に捨てがた
 いものがある。

天

稲垣秋月

ブレッドを眞黒にして軍事使。

評 オーヴァーシーして居る状子からの使ひでも
 あらう。トーストから黒い煙が立つとも氣が

かぬ光景で、子に對する愛の如何に深きか
 を、看取する事が出来る。

軸

置くところに置けばよかつたインキ壺。

互選

四月十五日句會

席題「咳」高次順

蜜會へ野暮な夜番の咳拂ひ。鈴木胡仙
 休ませて欲しい電話は咳拂ひ。山西里江
 手不足の勤めへ咳はおして出る。同
 咳拂ひもうよい頃と合圖する。安元時子
 夜更して崩す暮音へ母の咳。吉里竜耳
 お隣の咳へ寝られぬ夜が續き。島原潮風
 洗面所朝のしじまに響く咳。同
 咳の母熱へ看護の夜が白み。津村汀村
 御自慢の藝芸へ大きく咳が飛び。関 五松
 寢付かせてやり場に困る咳を各み。同
 初孫の咳へ家族は顔を寄せ。谷本晚香
 悪戯へ咳拂ひして通る叔父。同

名法話咳を封じた大廣間。吉里竜耳
子の咳へ寒夜を起る母の慈悲。同
歩哨兵咳一つない緊張み。谷本晚香
咳一つ氣兼してゐる壁一重。関五松
萬堂に咳一つない名辯士。津村汀村
暖くなつて油断の咳が出る。島原潮風
寂れさは咳き入る人の老い加減。同

互選

四月十五日句會

席題「虚勢」高占順

道げ道をこさへてからの空威張り。吉里竜耳
實力の腕へ虚勢はだまり込み。山西里江
強談へ腕の入墨わざと見せ。鈴木胡仙
負けぬ氣の虚勢を張つた過去を悔ひ。安元時子
就職へ小さな虚勢張つて見る同
居候虚勢を張つた酒の意氣。同
あいつ等と云ふ程口は利けもせず。関五松
空威張りだけで話の底見うれ。谷本晚香
虚勢では解決出来ぬ仕儀となり。鈴木緑松

もう虚勢張れない父の顔の皺。山西里江
格式が虚勢張らせる生活向き。吉里竜耳
借りて来た氣はいは見せぬ札を出し。島原潮風
虚勢張り後で淋しい夜の續き。津村汀村
逃腰の虚勢張つてゐる子の喧嘩。鈴木緑松
人頼み張つた虚勢の總くづれ。同
片肌をぬいで虚勢は足を組み。島原潮風
空威張一本だけで足らぬ酒。同

次回課題及宿題

添削課題「影多」「指多」締切五月十五日

句會課題「信仰コウ」三句吐締切五月十五日

同「早婚コウ」三句吐締切五月二十日

互選宿題「入智慧」「やり直し」各三句吐
「五月十日迄」私さへ

次回句會日は五月十三日(日曜)十九―三―Dにて

シカゴ川柳小句會

一九四五、四、一、
於矢形溪山宅

席題「やがて」三句吐

入選順

崎村白津選

やがて来る子等の世界へ我を折り。矢形溪山
太い夢描き流轉の日が續き。同

忍従のやがて花咲く春を待ち。山内不亂

やがて又世に出る希望白髪添ふ。竹下ゆづる

やがて来る春へ期待の水をやり。片山幽香

身に不運やがてく古稀に入り。竹下ゆづる

やがて逢ふ語り草にと句を集め。山内不亂

やがて咲く花に水やり旅に出で。同

産聲へ今日から貰ふ預金帖。矢形溪山

嚴寒の試練やがての春へ生き。竹下ゆづる

軸

生還を期せぬ征く日を母と座し。

席題「鳩」

寺の屋根鳩の睦言春を告げ。矢形溪山

動乱の世界へ鳩の持つ使命。同

鳩の夜情只だ圓滿なウキもれ。崎村白津

寢に歸る鳩の番を見届けて。同

餌を運ぶ人と知ってか鳩の群れ。片山幽香

日曜の朝へ餌を待つ戀の鳩。片山幽香
靈長も三枝の禮に頭が下り。竹下ゆづる
春長閑鳩はつがひで餌をあせり。山内不亂

互選 席題「育」(入点順)

教育をさせてまばゆい里の母。竹下ゆづる

育児法理屈を祖母は只だ笑ひ。崎村白津

今日の地位育てた母を偲ぶもの。片山幽香

育てあげホツとする間に召され征き。山内不亂

環境と別に征く子を笑む背丈。矢形溪山

獨りで育つた氣でおる齡二十歳。崎村白津

嫁にやり嫁を迎へて旅におる。山内不亂

幼稚園家庭を語る子のしぐさ。矢形溪山

貧困の昔を偲ぶ子の背丈。竹下ゆづる

來會者

崎村白津 山内不亂 竹下ゆづる

矢形溪山 片山幽香



インディアンの廢家

林元章盛

土の家は小さい。

それは粗末な初めて見たインディアンの土の家である。私はおどおどした眼付で見てゐたかも知れないけれど、粗末な土の家はきぢの儘で飾りけがないといふのでなかつた丈に痛く私の心に沁みた。途中來るとき、私は赭土の堤の上に汚れた被服の若い青年が腰を下してゐるのを見て通つた。青年は前のアルファルファの縁になつた平地を一心に見入つてゐた。けれども今私はそれ等を思ひ出しながら、この土の家の生活者が廢れた家のかげに疲れた目を持たず、青い平地を見入つてゐる青年の目の安らかさに、そこはかとなき微笑を禁じ得なかつた。

私は、檐端のどこぞにインディアンの祖先が着けて居た頭飾や弓矢はないものかと思ひ廻したが、別にそれらしいものはなかつた。私は、急に文明になつた彼等のこの態に失望もしなかつたが、猶そんな事に頭を費してゐたら、土の家の小窓の中で人影がちらつと動いた。窓はガラス窓で暗かつた。日光のかげんで

よくは分らなかつたが、その人影がガラス窓の中できると向きを更へたやうであつた。すると、コト／＼靴音が聞えて来た。

出て来たのは十六、七の娘であつた。だが、惜しいことには彼女は出した顔をすぐひっこませた。その時は、既に私はチラリと電光のやうなするどい速さで彼女の姿を見てゐた。その丸顔は、しよつちう見かける赤銅色のインデアンの青年とかわりはないけれどやはり若さが見えた。

瞬間、私達は連れの三人とほとんど一緒にハローと聲をかけた。而して、思ひがけない揃つた聲にハツと我ながら驚き、私達は笑ひ出してしまつた。

けれども、そのひと聲に朽ちた家の中から出てくれたインデアンの娘に私はあふないこと「お。セニオ！」と、叫んでしまふところだつた。彼女は赤地にむらさきの小さい花とみどりの葉を散らした模様ドレスを着てゐた。胸の四ツのボタンと人の目をかき乱すやうなネックの波状の襷取りが目に映つた。

最初、インデアンの娘はこの異様な来客に何か不安な顔色をした。私はすぐと彼女が私達に向けた視線の早く動いたのに驚いた。彼女はどうも我々三人連れを悪者に早呑みこみしてゐるらしかつた。これには我々は誇りを傷つけられた。だが、きつと彼女の家では見知らぬ人はさう思へ警戒せよと娘としての注意を小さい時から教へてゐたに違ひない。これは娘の素直な驚きであつて見れば、私は微悦を感じ明るい微笑を送らねばなるまい。私は何令にも、私達が悪

者でない証據を早く彼女に知らしめたかつた。

「あのね。僕達相談に来たのだよ。パーティするから鶏を十羽ほど分けて貰へないかと思って来たんだよ。」

と、私の連れが言った。

彼女は、急に愛想のいゝ笑ひを双頬にふくめた。夫れは一つの深く安堵した笑ひ方であつた。

「私のところには餘計ないのよ。」と言つて、「此の間来た人がずいぶん買つて行つたわ。」と、もう鶏を餘計飼つてゐない理由まで述べた。

「やつぱり日本人かい？」

「え。」

私達は、何か先手を打たれたやうな氣がした。

「フム。それで君の知り合ひで、鶏のたんとゐる家知らないかい。」

彼女は、さあと言ふやうな顔をした。彼女の嘘のない瞳を見てから、私は微笑した。而して、

「あなたを困らせるもいけないが、あの向ふのお家どうかい。」

彼女は、マスキッドの背後に見える一家を私と同じやうに見た。それも小さい土の家であつた。

「小さいのばかりと思ふが、めんどりはなか／＼賣つてくれさうもない。」

をとるんだから。私の家だつてさうよ。」

と、彼女は答へた。なるほど氣が付いて見ると、彼女の家のも残つてゐるのは
めんどりばかりだ。

「あれつきりかい。」

「えい。他のは小さいのばかり。」

と、言つた。

丁度その時、廣い前方のアルファファ畑を突つ切つて若い青年が息せき切つて
走つて来るのが目に付いた。私はそれを目撃したとき、サツとおそろしくなつた。
むかし讀んだメリメのカルメンの中の主人公に出會ふやうな思ひがした。遠く
の小さい影がだん／＼近づいて、私達の方へ向つて来るのが分つた。ホンの五
六間とはなれない近くまで来たとき、私はその青年に殺意がないかよく／＼調
べた。

「どうしたんだい。」

と、青年はハア／＼言ひながら言つた。

「鶏を分けて貰ひに来てゐるのよ。」

と、彼女が答へた。インディアンの青年は、急にへう／＼と笑ひ出した。

「ないよ／＼と、言つた。」

この會話からして青年はどうも彼女の兄うしかつた。夫婦ではないらしかつた。

松岡全權と博奕「廣」

芳川 積三

千九百五年頃、オレゴン州ポートランド市クーチヒ三街の角に、堂々たる輸入の大商店があつた。是ぞ當時太平洋沿岸邦人第一と謳はれた、布哇日本領事館書記生より、商業界に轉向して一躍成功した、伴信三郎商店である。商賣のサイド・ビジネスとして、U.P.N.P.O.などの鉄道や、各所の製材所に、邦人労働者を多数周旋して、目覺しき大發展を遂げたものだ。今しも、其の店內の奥まつた事務所の机を挟んで、一見スクールボーイの様な、聴かぬ氣を眉宇に現した二十歳前後の青年事務員と、色白な遊び人風のがつちりとした壯漢とが、互に口角泡を飛ばして、頻りに何か言ひ争つて居る。

「君の言ふのはよく解るが、然し、僕の立場になつて見給へ。僕は此の店の一介の雇人に過ぎないのだから、言ひ付けられた通りの事務を執つて居るだけの事だ。遺憾乍ら君の要求に對しては、何共御返事は致し兼ねる。」

「くどい様だが、今言つた通り考へて見ろよ。此の國に出稼に来て居る同胞

は皆、一日も早く金を儲けて國へ歸り、妻子や親兄弟と、楽しい生活をしやうとて、團子汁ばかり啜つて、脂と汗に塗れながら、日給九十五仙の鉄道働きをして居るんだ。其の僅な日給から、一日五仙の手数料を撥ねた上、更に月大枚一弗五十仙の事務費まで取るため、餘りに悪どいじやないか。丸で、同胞の生血を吸つて居る様なもんだぜ。同じ血を領つた同胞としてすべき事かどうか、考へて見ろよ！」

「全く以て、君の言ふ通りだ。宜し！ 僕も一個の日本男児だ。海外發展の第一線を弄つて奮闘して居てくれる皆様に對し、僕は職を賭して、断然店主と談判しやう。」

「頼むぞ、ヤング。若しも君がそれが爲に職を失つて、大學へ行く事が出来なくなつたら、鳥辭がましい言ひ條だが、僕等仲間でヘルプするよ。」

「あは……。御志は誠に有難いが、僕、大學へ行く位は自分で何とかして都合するよ。」

「あは……。言ひ過ぎたかも知れんが、悪く取つて呉れちや困る。然し、煽てるじやないが、君なら話せば解ると思つたし、亦一肌脱いで呉れるだらうと思つて、態と伴さんに會はず、君に頼んだ様な譯だから、何分骨を折つて呉れよ。」
此の二人——前者は、後の近衛内閣の外務大臣たりし松岡洋右氏で、當時オ

レゴン大學に在學中であつて、余暇に伴商店の事務員として働いて居つたのだ。後者は、自ら遊俠を以て自任する、山口縣出身の通稱「博愛廣」事、廣田源次郎で、同郷の誼みがある上、俗に言ふ「駒が合ふ」のか、二人は肝膽相照し、喧嘩もするが、相談相手にもなる仲であつた。洋右青年は、伴との話が旨く纏うなかつたか、間もなく同店に働くのを止め、ポートランド日本人會の書記を努めながら、相変らず學業にいそしんで居つたが、聽て優等の成績を以て同大學を卒業し、故國に錦を飾つた。

幾春秋を経て、千九百三十三年、山地水明のジエネバに開かれた國際聯盟會議に臨み、各國代表を相手に、孤軍奮闘を續け、世界にその名を謳はれた事は未だ讀者諸子の記憶に新たなるどころであらう。

松岡全權は其の歸途、久し振りに母校オレゴン大學を訪ふべく米國東部を経由して来る事になつた。帝國出先官憲及び各地在留同胞代表者は全權を、華州パスコ市驛迄出迎へたのであるが、その中に混つて、見窄しい装をした相當の年輩の一日本人が居たが、彼は懇懃な態度で全權に面會を申し込んだ。取次ぎに出た時の田中羅府領事が、其の風采の揚らない姿を見て、

「誠に、お氣の毒ですが、只今全權は大変お忙しい上に、長途のお疲れでゐるうしやいますから、成るだけごなす様にも御面會は御断り致してあります。で

すから、悪しからず……。」と謝絶しやうとした。

「然うで御座いますか。實は私は廣田源次郎と申す、松岡さんと同郷の者で、松岡さんがオレゴン大學時代特に御懇意に預かつた者で、今度松岡さんが此方へ御出になる事を承りましたものですから、お懐しさの余りお出迎へに参りました様な譯で、詰らん私がお忙しい松岡さんに強ひてお目通り致したいとは思ひませんが、只斯う言ふ者が出迎への中に混つて居つたと、お席がありましたら御傳へ下されば結構で御座います。」と、その男は丁寧に依頼した。その話し振から推して彼は全權と大変懇意である様に思はれるので、兎に角、全權に通じて見やうと思つて、田中領事は悄悄向ふに行かうとする廣田を呼び止め、

「暫くお待ち下さい、一應全權に伺つて見ますから。」

と、廣田を其處に待たせ、急いで車中に入つた。

目の前に、山が崩れてもびくともしない様に、どつかりとアーム・チェアーに腰を下してシガーをくゆらし、紫色の煙の行く手を怨々と見入りながら、出迎へる者の挨拶を受けて居る全權に斯くと耳打ちすれば、

「何つ、廣が来たッ、何處に居るのか？」

呆氣に取られて居るお偉方の代表を後目に向け、飛び上がるや、昇降口に急ぎやつて来て、其處にぼんやりと佇んで居る廣田を見るより、彼の肩を両手で

ぐつと掴んで、

「おう、廣ッ、お前まだ生きて居ったか……」。

見る／＼松岡全権の眼は潤んでいった。

「まあ、上れ……」。

全権が斯く逆親しくする、此の風體の揚らぬ者は一體何者であらうかと、訝る数名の護衛や其處に居るお登々に頓着なく、廣田を自分の傍に腰かけさせ、別れてから三十年といふ長い間のポートランドの変遷や、あの當時の誰彼の其の後の消息を根掘り葉掘り尋ね、飽く事を知らず聞き入つて、ポートランドに到着してから、スケジュールを作るべく、色々心配して居る領事館員や、母校大學の歓迎委員の打合せを上の方で聞いて、生返事や頓珍漢な返事をして人々を手古摺らしたものだ。其れ程興味を以て廣田の話聞くのであった。ポートランドに着く少し前全権は、

「廣、まだ話したい事があるから、俺の宿舍に訪ねて来い。」

と、言つた。

ポ市停車場ではオレゴン大學總長や、校友會の面々、ポ市々長その他の出迎へを受け、一先づポ市第一のホテル・マルトの宿舍に落着き、それより母校訪問や、留學當時世話になつた白人で、鬼籍に入つた人々の墓参やらで、目の廻るやう

な忙がしい數日を過し、いよく思ひ出深きホ市を出立する前の晩、廣田はマ
ルト・ホテルの松岡全權の宿舎を訪れた。全權は早速彼を自らの居間に呼んで、
親しく話し合ふのであつた。

「廣、儲かるか？」

「昔の様に、鴨が居なくなつたから、今頃は儲からないよ。」

「それじゃ、何をして、食べて行くのだ？」

「シーズンに、アラスカの鮭鱈詰會社へ働きに行き、それで足りない時には、
ちよいと田舎の百姓家の働きに行くのさ。」

「博英は止まんか？」

「あは………」

「まあ、いゝ、それがお前の一生だ。然し食へなくなつたら、何時でも日本
へ歸つて来いよ。お前一人位食べて行かれる様には、してやるぞ。」

「有難う、頼むよ………」

と、言つて、廣は思はず涙ぐんだ。

「是は少いが、コーヒーでも飲んで呉れ。」

と、廣の手に封筒を握らせたのであつた。

(終)

SHOP
at
SEARS
and
SAVE

IMMEDIATE DELIVERY

セラーの皆様から
お引立てを蒙る所
もすしやスミ利
用をい

必ず常約集事

注文に即座で

取扱迅速

ロスアンゼルス市

シーヤス

ロバック商会

SEARS ROEBUCK & CO

LOS ANGELES, CAL.

編輯後記

○ 四月廿二日文協主催の下にピクニックをポストン市立公園に於て催し、諸種の運動競技には老かも若きも相共に打ち興じ、愉快な一日であつた。『婆娑』のやうに生活のため齟齬と慟かなくとも済むポストンだから、囁みし文人や愛讀者諸君が馳参じて、緑滴るモスキッド林の中、新鮮な空氣を呼吸し乍ら、悠々として一日を愉快に遊ぶであらう。さう期待したのであつたが、集まる人が意外にも少かつたのはどうした譯であらうか？ 婆娑化したポストン人は余りにも忙しすぎるのだらうか？

○ 寫眞愛好家活躍の好シーズンとなつた。諸君の活躍を期待すると同時に、六月號は諸君の立派な作品特輯號とする計劃である事を茲で豫告しておきます。○ 本誌は到處で好評を博してゐる様で



各地の皆様が
よく飲んでくださる
マル昭

アリゾナ・グレンデール市
昭和植物油醸造会社

SHOWA SHOYU BREWING CO.
PT. 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

ある。又偏へに本誌を
愛して居て下さる寄稿
家、画家、編輯、印刷
製本並びに配本部の人
々が渾然一体となつて
協力して居る賜物であ
る。御支援下さる皆様
に厚く御禮申します。

○ 今月號は「ポストン
繪物語」及び「山行記」
特輯號とした。

○ 原稿は出来得るだけ
楷書で認めて下さるや
う寄稿家諸氏に御願ひ
します。

○ ピクニックの際は警察
署員其他の方々より特
別の御援助を蒙り、又、
芳川積三氏並びに本協
會々計亀重久子嬢の尊



三大製品

大星印

白味曾

寶千趣

りや電中品

寶千趣は特に

主筆米石に

デパート・イン・ザ・ロウ

羅府信油廠建金社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO.

父伊平氏より、運動競技に景品を澤山寄贈して頂きました。御禮申します。

- 成人教育部主催の展覧會は還に日本人の優秀性を發揮したものであつた。

ホニムス・ホールには美術品、珍石細工品、ホニムス・ホールには裁縫、テーラーイング、刺繍、華道各學校生徒の作品、ホニムス・ホールは彫刻科、書道並びに造花の出品等。轉住所内で斯うした立派な作品を成し、意義深き仕事に精通されて居る諸氏に深く敬意を表す。

- 廿七日より一週間に亘る「ユース・カシフレンス」及び廿八日夜小學校講堂で催された婦人會主催の「軍人並びに其家族慰安の夕」は共に有意義な企てであつた。

- 外部視察の爲五月一日出發された錦聲會の師範藤原一葉氏より御寄附を頂きました。深く謝意を表すると同時に師の御健康を祈ります。

ポストン文藝

第一卷 第五期
一九四五五月號

編輯

松原信雄

同

有田百

同

島原潮風

同

重富初枝

印刷所

ポストン印刷所

發行所

ポストン文藝協會
(統政部内)

POSTON POETRY CLUB
UNIT I, CITY HALL,
POSTON, ARIZ.

Vol. 3, no. 5
May 1945

P O S T O D
P O E T R Y

